高年齢層の夫婦における夫の家事参加

—夫婦の就業、健康状態、介護への従事、世帯構成、性別役割分業観の影響—

岩井紀子

（大阪商業大学総合経営学部）

Husband's Participation in Housework among Elderly Couples

Effects of work status, health condition, caring experience, household structure and gender role ideology of wives and husbands

Noriko IWAI

本稿では、全国家族調査（1999年）のデータを用いて、高齢夫婦における夫の家事参加を規定する要因について一般線形モデルで分析している。分析対象は、夫が60歳代（男性624；女性595）と70-77歳（男性332；女性306）の夫婦である。結果は以下のとおりである。1）夫の家事遂行頻度についての認知は、男女で異なり、男性の方が全般的に高く認知している。2）夫の家事参加を規定する要因は、男性の回答と女性の回答で異なる。3）60代の夫婦と70-77歳の夫婦で異なる。4）家事の項目によって異なる。5）子ども夫婦との同居の影響が非常に強い。6）妻の家事遂行頻度の影響も非常に強く、この要因をコントロールすると、60代の夫婦では妻の就業、夫の就業、妻の健康状態の影響が低下する。7）妻の性別役割分業志向が強いほど、60代の夫が食事の用意を行なう頻度は抑制される。

キーワード：夫の家事、退職、世帯構成、性別役割分業観

Using a national representative sample of Japanese families (1999), this study analyzes conditions under which husbands contribute to housework among elderly couples. Data on couples whose husbands are in their 60s (No. of male respondents: 624; female: 595) and those between 70 to 77 years old (male: 332; female: 306) were analyzed using generalized linear models. Major findings are as follows: 1) the level of husbands' involvement differs by the sex of respondents; 2) factors affecting husbands' involvement differ by the sex of respondents; 3) those effects differ by the age of husbands; 4) those effects differ by the kind of housework; 5) living with a married child is an influencial factor on husbands' involvement; 6) the level of wives' involvement is another significant factor—by controlling this factor, effects of wife's work status, husband's work status and wife's health condition decreases; and 7) the level of involvement in preparing dishes by husbands aged 60s is lowered when their wives hold traditional gender role ideology.

Key words: husband's housework, retirement, household structure, gender role ideology

1. 研究の目的

(1) 本研究の目的

本研究では、夫の家事参加に影響を与える要因についての日米の先行研究（岩井, 1997, 2001, Iwai, 1998においてレヴュー）を検討したうえで、第1回全国家族調査（1999年実施）のデータを用いて、高齢夫婦における夫の家事参加に焦点を当てて分析を行う。

夫の家事参加を夫の年齢別ないし妻の年齢別にみると、NHKの国民生活時間調査（1996)、総務庁の社会生活基本調査（1988, 1993)、日本大学による現代家族に関する全国調査（1994)、国立社会保障・人口問題研究所による家庭動向調査（西岡, 1995, 図3-1；Nishioka, 1998, Fig.1)、社会階層と社会移動調査（ＳＳＭ調査；岩井, 1998, 図1）のいずれにおいても、40代を底とするＵ字曲線を描いている（Iwai, 1998)。すなわち、夫の家事参加は、若年層の夫婦と高齢層の夫婦では、中年層の夫婦に比べて高い。生活時間調査によると、60代・70代の男性では、家庭の雑事に従事する時間が著しく延びており、掃除に従事する時間も長くなっている。公民館では男性を対象とした料理教室が開かれ、60歳以上の男性に的をしぼった民間の料理教室もある（朝日新聞1998年2月6日)。月刊誌「グッドハウスキーピング」が主夫コンテストを募集したところ、応募した男性の1割は60歳以上であったという（朝日新聞1999年1月5日)。

高齢夫婦の多くは、30年以上の歳月を積み重ねて、家庭における夫と妻のそれぞれの役割についての考えと実践のパターンが出来上がっているように思われる。にもかかわらず、夫の家事参加に変化が生じるのである。高齢期において夫の家事参加を促進する要因は何であろうか？

高齢期の夫婦の就業形態やその組み合わせは、中年期の夫婦に比べて多岐にわたっている。夫は退職したが、妻はまだ就業を続けているという組合せも少なくない。高齢期には、子どもが家を出るあるいは社会人としての生活に移行することにより、夫婦が共有する時間と共同行動が増す。夫の家事参加は夫婦の共同行動の一つとして増えているのかもしれない。また、高齢になると健康状態に関して不安要素が多くなり、お互いを気づかう必要性が高まる。妻が夫の健康を気づかうだけでなく、日常生活に支障のある妻を夫が気づかうケースも少なくない。さらに、男女ともに平均寿命が世界一長く、親との同居率が高く、介護が家族に期待されている日本においては、高齢夫婦の多くは同居や別居の親を現在介護しているあるいは過去に介護した経験をもつ。このような介護経験は、高齢期の夫の家事参加の増加と無関係であろうか？本研究では、高齢夫婦において夫の家事参加が増す要因とその背景について分析することにより、なかなか進まない中年期の夫婦における夫の家事参加について考える一助としたい。

(2) 高齢夫婦の家事分担に関するアメリカの研究

アメリカでは、生活時間調査はもちろんのこと、National Survey of Families and Households (NSFH)、Panel Study of Income Dynamics、National Longitudinal Suveys of Labor Market Experience などの全国調査に、夫の家事参加に関する項目が組み込まれている。夫の家事参加の促進要因・疎外要因だけでなく方法論に関しても、精力的に研究が進められている。これら

の研究の大半は、乳幼児や学齢期の子どもがいて家事の絶対量が膨大で、夫の家事分担が期待される若年層や中年層を対象としている。しかし、労働人口に占める雇用者の割合が高いアメリカでは、退職が生活にもたらす変化についての関心がかなり以前から高く、退職した夫の家事参加やその妻の家事時間の変化に関する研究が脈々と続いている（Lipmen, 1961; Ballweg, 1967; Keith et. al., 1981; Dorfman & Heckert, 1988; Keith & Schafer, 1991; Dorfman, 1992; Vinick et. al., 1992; Keith, 1994; Szinovacz & Harpster, 1994など)。

60年代の研究では、退職した夫は特別な技能や知識を必要としない家事（ゴミの始末/服の片付け）や妻と一緒にできる家事（買い物/皿ふき/朝食の机の上の片付け）に参加することが多くなるが（Lipmen, 1961)、夫が責任をもって担当するのは、機械的な技能や力を必要とする家事（家具の移動や修理/蛇口の修理/ゴミの始末）や管理的な家事（請求書をチェックし小切手を切る）に限られていた（Ballweg, 1967)。一方、意識の上では「退職したら、妻は、夫が家事に参加することを期待する権利がある」という意見に、退職した夫の58%、その妻の62%が賛成を表明していた（Lipmen, 1961)。

70年代以降の調査研究においても、退職した夫が参加する家事は、発生頻度の少ない目先の変わった男性領域の家事（masculine tasks）に偏る傾向は変わらない。しかし、繰り返しの多い時間を要する女性領域の家事（feminine tasks）への参加時間も、退職後に有意に増加し（Dorfman & Heckert., 1988；農業従事者)、退職した夫の方が就業を続けている夫よりも有意に長い（Keith et. al., 1981; Keith & Schafer, 1991）という結果が報告されている。60年代以降、中年女性の就業率が高まったこともあり、80年代には、退職は夫だけの問題でなく、「夫婦がともに経験する（couple experience）」（Szinovacz et. al., 1992）出来事となった。その結果、夫のみならず妻が退職した場合や夫が妻よりも先に退職した場合など、多様なケースについて夫と妻の家事時間や家事分担が論じられるようになった。

なかでもSzinovacz & Harpster（1994）は、NSFHのデータを用いて、これらの点を詳細に検討している。NSFHのメイン・サンプルから夫55歳～72歳（平均63.4歳)、妻50歳～72歳（平均63.2歳）のデータを抽出し、夫の就業の有無（就業/退職）と妻の就業の有無（就業/退職/専業主婦）のそれぞれの組合せについて、夫と妻の家事時間（female tasks の時間とmale tasks の時間）と家事の分担率を比較している。Szinovacz らによると、就業地位が家事に与える影響は、夫の場合と妻の場合で、また、female tasks の場合とmale tasks の場合で、さらに妻の就業歴（退職して主婦になった/ずっと専業主婦）により異なる。本研究の焦点である夫のfemale tasks（調理/皿洗い/掃除/洗濯）に従事する時間は、夫の現在の就業地位よりも妻の現在の就業地位に左右される。すなわち、退職した夫は、妻が退職している場合よりも就業している場合の方が家事時間が長く、就業している夫も、妻が退職していたり専業主婦を続けている場合よりも就業している場合に家事時間が長い。例外は、退職した夫と専業主婦の組合せで、夫の家事時間は、夫と妻がともに退職しているケースよりも長い。なお、妻がfemale tasksに従事する時間は、夫の就業地位ではなく、妻自身の就業地位に左右されており、妻の就業を巡る夫と

妻のfemale tasks の家事時間の多寡は方向性としては対応している。Szinovacz らの分析では、夫婦の就業地位以外の要因—夫と妻の健康状態、世帯構成、性別役割分業観など—の影響についても検討しているが、これらについては、次節の該当する項において論じる。

Keith（1994）もNSFHのデータを用いているが、Szinovacz らよりは高齢の夫婦（夫65歳～90歳、平均72歳；妻65～97歳、平均71歳）を対象としており、feminine tasks に買い物の時間を含めている。Keith はまたSchaferとともに（1991)、アイオワ州において４つのファミリー・ステージにある世帯を抽出して、夫婦の家事参加についての分析を行なっている。妻の年齢が60歳以上で子どもが巣立っている夫婦（夫の平均71歳、妻の平均69歳）の夫は、若年や中年の夫に比べて、feminine tasks（皿洗い/洗濯/買い物）への参加が有意に多く、その妻の参加は有意に少ない。一方、Szinovacz らの結果とは異なり、高齢の夫ならびに妻の家事参加は、夫や妻の就業地位とは関連していない。この違いは、対象とした夫婦の年齢の違い—Keith らの対象の方が高齢—によるのかもしれない。

本研究では、全国家族調査のデータのうち、夫が60歳以上の高年齢層の夫婦に焦点をあてて、アメリカでの先行研究ならびにＳＳＭ調査と家庭動向調査のデータを用いた分析の結果（岩井, 1998, 2001；岩井・稲葉, 2000）と比較しながら、夫の家事参加について詳細な検討を加える。次節では、高齢夫婦の夫の家事参加に影響を与えていると思われる要因とそこから導き出される仮説について順に検討する。

2. 分析の視点

（1）夫婦の就業と夫の家事参加

アメリカの先行研究が指摘しているように、高齢期において夫の家事参加が高まる要因のひとつは、高年齢層の夫が就業による時間的制約から次第に解き放されて、家事に参加する時間的余裕が出てくることであろう。定年が近づき多忙な要職からしだいに遠ざかる、退職後フルタイムではなく嘱託や臨時雇用の形で勤務する、再就職しないで無職になるなどのケースが考えられる。就業による時間的制約から解き放たれるのは、夫だけでなく就業してきた妻も同様である。ただし、夫と妻の年齢差を考えると、高年層では中年層の夫婦とは異なり、夫は退職したが妻はまだ就業を続けているケースが、ある程度観察される。

ＳＳＭ調査データ（女性による回答の分析）では、サンプル全体についてみると、掃除・洗濯に関しても炊事に関しても、無職の夫の参加が多いが、妻の就業形態の効果は認められなかった（稲葉, 1998)。一方、夫の年齢が60代の夫婦に限ると、掃除・洗濯については、夫の就業と妻の就業のそれぞれの主効果が認められ、炊事については、夫が不就業で妻が就業している組合せの場合に、夫の家事参加が多いという交互効果が見出された（岩井, 1998)。

家庭動向調査のデータ（女性による回答）においても、無職の夫の家事参加が有意に多い傾向は30代（夫の年齢）から観察されるが、60代になると顕著である（岩井, 2001）。一方、妻の就業に関しては、妻が就業している場合に夫の家事参加が有意に多い傾向（とくに洗濯、炊

事）が20代から60代まで一貫して観察される。60代の夫婦では、ゴミ出し、買い物、掃除、洗濯、炊事のすべてについて、夫の就業と妻の就業のそれぞれの主効果ならびに交互効果が見出された。

全国家族調査では、回答者ならびに配偶者の就業状態について尋ねている。本研究では、夫の就業、妻の就業ならびにその組合せと、高齢層の夫の家事参加との関係を分析する。退職した夫は、就業している夫に比べて、家事への参加が実際に多いのであろうか？ 退職して家にいる夫は、就業する妻の家事の負担を軽減しているのだろうか？ 家にいる夫も、妻が就業していない場合には、家事には手を出さないのであろうか？

夫と妻の就業率は、年齢が進むにつれて減少する。それにともなって、夫と妻の就業が夫の家事参加に及ぼす影響も変わるかもしれない。前述したように、回答者の年齢が平均63歳のデータでは、夫の家事参加は妻の就業上の地位の影響を受けていたが（Szinovacz & Harpster, 1994)、回答者の年齢が平均70歳のデータでは、妻ならびに夫の就業上の地位の影響は認められなかった（Keith & Schafer, 1991)。また、ＳＳＭ調査と家庭動向調査のいずれにおいても、夫の年齢が70歳以上の夫婦においては、夫や妻の就業が夫の家事参加に与える影響は、60代に比べてはるかに弱かった（岩井, 1998, 2001)。したがって本研究では、夫の年齢が60代の夫婦と70歳以上の夫婦のそれぞれについて、夫の家事参加に影響を与える要因とその効果に関する分析を進める。

(2) 夫婦の健康状態と夫の家事参加

60代から70代の夫婦を対象にした調査によると、双方とも健康な夫婦より、夫あるいは妻または両者とも健康状態のよくない夫婦の方が、夫が家事参加している割合が高い（兵庫県家庭問題研究所, 1987)。NSFHを用いたSzinovacz & Harpster（1994）の分析によると、夫の健康状態は、夫の家事時間（調理・皿洗い・掃除・洗濯）に影響を与えていないが、妻の健康状態は影響を与えている。妻が身体に支障を抱えている場合には、夫の家事時間が増す。また、家事の中でも買い物や庭仕事（車関係は除く）に夫が費やす時間は、夫自身が支障を抱えている場合に減少する。一方、Keith（1994）によるNFSHの分析では、同年代の他の人々よりも健康であると感じている夫は、家事時間が長い。ただし、Keithは買い物の時間を調理・皿洗い・掃除・洗濯の時間に加えている。二つの分析が対象とした夫婦の年齢の違いを考慮すると、夫の家事参加に対する夫の健康状態の影響は、前期高齢者よりも後期高齢者において表れてくるのだろう。

家庭動向調査のデータを用いて、妻ならびに夫自身の健康状態が夫の家事参加に与える影響を分析したところ（岩井, 2001)、夫婦の年齢や家事の内容によって異なる影響が観察された。夫が60代の夫婦では、妻が日常生活で手助けを必要としている場合には、夫はゴミ出し、洗濯、炊事を有意に多く行なう。一方、夫自身が手助けを必要とする場合には健康な場合に比べて、買い物に出かける頻度が有意に少ない。洗濯については、妻が手助けを必要としていて夫が健

康な場合に夫の参加がとくに多いという交互効果も観察された。夫が70歳以上の夫婦では、夫の家事参加は、妻の健康状態よりも夫自身の健康状態に左右されているが、炊事については、妻が手助けを必要としていて夫が健康な場合に夫の参加がとくに多いという交互効果が観察された。

全国家族調査では、回答者ならびに配偶者の過去1年間の健康状態について尋ねている。本研究ではこれを健康状態の指標として、妻の健康状態が悪い時に、夫の家事参加が高まるかどうかを検証する。また、夫自身の健康状態による影響について検討する。さらに、妻の健康状態と夫の健康状態のあいだに交互作用のある可能性について検討する。妻の健康状態が思わしくないが、夫自身は健康な場合に、夫の家事参加はとくに高まるのではないだろうか？ 妻や夫の健康状態が夫の家事参加に影響を与えるとすれば、その影響は60代よりも、健康への不安が高まる70歳以上の夫婦の方が強いのであろうか？

(3) 夫婦の介護経験と夫の家事参加

高齢者の日常生活において、健康や就業と並んで大きな影響を及ぼしうる要因のひとつに、介護があげられる。自らや配偶者が介護を必要としているケースだけでなく、同居している高齢の親の介護に従事していたり、あるいは別居している親の介護に通っているケースでは、夫婦の日常生活にさまざまな影響が生じているであろう。有配偶者の40歳時の平均余命（1995年時点; 国立社会保障・人口問題研究所, 2000）が男性で39年、女性で45年を超える現代の日本では、60代の高齢者が80代後半の高齢者の介護をしていることは珍しいことではない。

男性と介護については、妻や自分の親を介護する男性に注目したケース・スタディや調査研究が、近年報告されている（Kaye & Applegate, 1991; Harris & Bichler, 1997; Harris & Long, 2000)。介護には家事補助の要素が多く含まれているので、介護の研究は家事についても知見をもたらす。しかし、男性の介護と男性の家事との関連について検討した研究はほとんどない。

介護の相手が妻である場合は、介護と家事の内容が重なることが少なくない。したがって、現在妻を介護している夫は、家事への参加も多いはずである。逆に、夫が妻から介護される状況にあるならば、夫の家事参加は少ないと思われる。ただし、この二つの仮説は、妻の健康状態や夫の健康状態が夫の家事参加に与える影響に関する仮説と重なってしまう。

家庭動向調査のデータを用いて、夫と妻の健康状態をコントロールしたうえで、夫ならびに妻の介護経験が夫の家事参加に与える影響を分析したところ、結果は以下のとおりであった（岩井, 2001)。現在あるいは過去において1ヶ月以上家族の介護に従事した経験をもつ夫は、介護経験のない夫に比べて、ゴミ出し、買い物、掃除、洗濯、炊事のいずれに関しても有意に多く行なっていた。一方、妻の介護経験（現在介護に従事しているか否か）は、他の変数をコントロールすると有意な効果を示さなかった。これらの結果は、夫が60代の夫婦だけでなく、70歳以上でも共通していた。

全国家族調査では、回答者自身ならびに配偶者が、「家族や親族の看病・介護」を現在どの

くらいの頻度で行なっているかについて尋ねている。さらに、58歳以上の回答者に対しては、死別した親（回答者の両親と配偶者の両親）の介護や看病に回答者自身がどの程度関わったかについて、また、現在、介護や看病を必要としている配偶者に対して、回答者自身がどの程度の介護を行なっているかについて尋ねている。本研究では、これらの質問に対する回答の分布を検討したうえで、夫あるいは妻が現在、家族や親族の看病・介護をしているかどうかが、夫の家事参加に与える影響について分析する。

(4) 夫婦の性別役割分業観と夫の家事参加

妻が就業していて時間に余裕がなかったり、健康状態が思わしくなかったりする一方、夫が健康で時間的余裕があり、家族や親族の誰かの看病や介護に現に関わっているという状況においても、妻が伝統的な性別役割分業観を強く支持している場合には、夫が家事に参加することは少ないのであろうか？ 日本では、妻の性別役割分業観と妻の就業との間には強い関連は認められず、イデオロギーと現実の行動は乖離している。妻の性別役割分業観は夫の家事参加に対して影響を与えていないのだろうか？ 一方、夫自身の性別役割分業観と夫の家事参加との関係はどうであろうか？

アメリカの先行研究においては、夫の家事参加は、妻の性別役割分業観よりも、夫自身の性別役割分業観をより強く反映するという結果が多い（Shelton and John, 1996；Coltrane, 1996)。退職期にある夫婦を対象としたSzinovacz and Harpster（1994）の分析においても、夫のfemale tasksの家事時間は、妻の家族役割観や性役割観とは関連していないが、夫の家族役割観とは関連している。伝統的な家族役割観の強い夫ほど、家事時間が少ない。ただし、夫の性役割観は夫の家事時間と関連しておらず、高齢夫婦においては、性役割観の影響は小さいのかもしれない。Keith and Schafer（1991）は平均年齢70歳の夫婦では、夫と妻の性別役割分業観は夫の家事参加に直接影響を与えていないことを示している。性別役割分業観の影響は、夫婦の年齢が上がるにつれて関係なくなるのであろうか？

家庭動向調査のデータでは、妻の性別役割分業観は30代や40代の夫の家事参加とは関連しているが、50代、60代ならびに29歳以下の夫の家事参加には影響を与えていない（Nishioka, 1998)。ＳＳＭ調査データにおいては、サンプル全体についても、８才未満の子どものいる夫婦についても、60代の夫婦についても、夫の家事参加（女性の回答）に対する妻の性別役割分業観の主効果は認められなかった（稲葉, 1998; 岩井, 1998)。一方、夫自身の性別役割分業観と夫の家事参加（男性の回答）との間には関連があり、性別役割分業志向が強いほど家事参加が少なかった。

全国家族調査では回答者に、家庭を巡る男女の性別役割分業について尋ねている。本研究では夫の家事参加について、男性による回答（夫自身の回答）と女性による回答（妻から見た夫の家事参加）にデータを分けて分析を行なう。男性による回答では、夫自身の性別役割分業観の影響を、女性による回答では、妻の性別役割分業観の影響を検討する。

(5) 夫の家事参加と世帯構成—親との同居・子ども夫婦との同居・未婚成人子との同居—

夫の家事参加に影響を与える要因のうち、日本の家族に特徴的な要因として、親との同別居がある。親と同居している拡大家族では核家族に比べて、夫の家事参加が少ない（Tsuya, 1996; 岩井, 1997; Iwai, 1998では生活時間調査や社会生活基本調査の集計表を検討)。ただし、これらの分析の多くは、学童期の子をもつ夫婦（岩井, 1997）や夫または妻が60歳未満の夫婦（Tsuya, 1996）など、若年層や中年層の夫婦を対象としており、高齢夫婦についての分析は少ない。高齢層の夫婦においては、既に親が死亡しているケースが多いために分析に乗りにくい。しかし前述したように、女性の平均寿命が80歳をこえている現代の日本においては、少なくとも60代の夫婦については、親との同居の有無が、夫の家事参加に与える影響を検討してみるべきであろう。60代の夫婦が高齢の親と同居している場合にも、若年や中年のケースと同じように、核家族に比べて夫の家事参加は少ないのだろうか？

世帯構成が夫の家事参加に影響を与える可能性として、親との同居以外に、子ども夫婦との同居ならびに未婚成人子との同居の要因があげられる。親と同居している夫婦において夫の家事参加が少ないように、子ども夫婦と同居している夫婦においても、夫の家事参加は少ないのであろうか？もしそうであれば、二世代の夫婦が同居している場合には、親夫婦においても、子夫婦においても、夫の家事参加は少ないことになる。一方、日本では、大学生は言うに及ばす、社会人として自立しているはずの子も、衣食住にわたって親に身の回りの世話を委ねている状況が、今や社会現象として注目を集めている。未婚成人子との同居は、夫の家事参加に何らかの影響を与えているのだろうか？

NSFHの分析によると、同居している未婚成人子は家事（家屋や車の修理などの家事も含む）にかなり参加している（Spitze & Ward, 1995)。しかし自分たちが発生させる家事の量を考慮すると、未婚成人子が息子である場合は母親の家事時間をむしろ増加させ、一方、娘である場合は母親と父親の家事時間を減らしている（South & Spitze, 1994)。

ＳＳＭ調査データではケース数の制約から、世帯構成については、夫婦二人暮らし/他に世帯員がいるにしぼって分析を行なった（岩井, 1998)。夫が60代の夫婦では、夫婦二人暮らしであることは夫の家事参加に影響を与えていないが、70歳以上の夫婦では、妻と二人で暮らしている夫は、炊事についても掃除・洗濯についても、かなり積極的に参加していた。70歳をこえ身体の衰えを感じながら生活している夫婦においては、手助けをしてくれる他の世帯員がいない時に、夫の家事参加が多いのである。NSFHの分析においても、夫婦以外の世帯員がいる場合には、二人暮らしの場合に比べて、夫の家事時間は有意に短い（Szinovacz & Harpster, 1994)。

家庭動向調査では、二世代以上の夫婦が同居している場合には、最も若い世代の妻が回答することになっていたので、子ども夫婦との同居が夫の家事参加に与える影響については分析できなかった。一方、親と同居している場合に夫の家事参加が減少するという関係は、夫が50代以下の夫婦ではあてはまったが、夫が60代や70歳以上の夫婦には認められなかった（Nishioka, 1998；岩井, 2001)。

本研究では、60代の夫婦と70歳以上の夫婦のそれぞれにおいて、未婚成人子との同居、既婚子との同居ならびに親との同居（60代のみ）が夫の家事参加に与える影響について検討する。

(6) 男性の回答と女性の回答の違い

以上の議論を踏まえて、本研究ではまず、夫の年齢別に夫の家事参加を比較し、高齢期における夫の家事参加の状況を観察する。そして、一元配置の分散分析と一般線形モデルを用いて、上述した要因の効果について検討する。すなわち、妻の就業、夫の就業、妻の健康状態、夫の健康状態、夫の介護経験、妻の介護経験、夫の性別役割分業観、妻の性別役割分業観、親との同居、未婚成人子との同居、子ども夫婦との同居のそれぞれの要因ならびにこれらの交互効果が、60代の夫と70歳以上の夫の家事参加に与える影響について検討する。

先行研究によると、夫の家事参加について夫婦の双方からデータを得た場合には、夫の方が自分の家事遂行を高めに回答することが知られている（Huber & Spitze, 1983；Kamo, 1997；永井, 1998)。ただし、時間や頻度ではなく「いつもする」「ときどきする」「ほとんどしない」というスケールで、男性や女性（夫婦ペアではない）に夫の家事参加について尋ねたＳＳＭ調査のデータでは、男性による回答よりも女性による回答の方が、夫の家事参加が高かった。また、夫の家事参加を家族のライフステージや夫の年齢を横軸にしてプロットすると、女性の回答によるとＵ字曲線を描いたが、男性の回答では家族のライフステージによっても、夫の年齢によってもほとんど変化がなかった。さらに、男性の回答と女性の回答とでは夫の家事参加に影響を与える変数に違いが見られた（稲葉, 1998；岩井, 1998)。

ＳＳＭ調査データにおいて観察された回答者の性別によるこのようなズレは、主観的な判断基準が男女で異なる上に（稲葉, 1998)、３つのカテゴリーで程度を尋ねるという粗いスケールであったことに起因するのではないかと推察される。しかしながら、回答者の性別によって、夫の家事参加に影響を与える変数に違いが見られるという点については、本研究においても留意したい。したがって分析に際しては、夫の年齢（60代、70-77歳）だけでなく、回答者の性別によってデータを分ける。すなわち、夫の家事参加についての、男性による回答（夫自身の認識）と女性による回答（妻の認識）のそれぞれについて分析を行なう。

3. データと指標

(1) データ

本研究では、日本家族社会学会全国家族調査委員会が1999年１月に実施した第１回全国家族調査（ＮＦＲ98）のデータを用いる[1]。調査の母集団は、日本全国に居住する28歳以上77歳以下の者であり、標本数は10,500、回収数は6,985である。

本研究ではこのうち、夫と妻が同居しており、夫の年齢がわかっている5,625票を分析の対象としている。とくに、夫の年齢が60歳代（男性回答者624ケース、女性回答者595ケース）と70-77歳（男性回答者332ケース、女性回答者306ケース）の夫婦における夫の家事参加につ

いて、詳細な分析を加える。回答者が女性の場合には、夫の年齢が78歳以上のケースが84ケース観察された。これらのケースについても分析を行なったが、ケース数が少ないために解釈が難しいこともあり、本稿では取り上げない。

(2) 夫の家事参加の指標

全国家族調査では回答者に、回答者自身と配偶者が、現在どのくらいの頻度で家事を行っているかを尋ねている。「食事の用意」「洗濯」「風呂のそうじ」のそれぞれについて、「ほぼ毎日」「1週間に4～5回」「1週間に2～3回」「週に1回くらい」「ほとんど行わない」という5つの選択肢で回答を求めている。

表1は、男性からみた自分たちの家事参加の頻度と、女性が妻の立場からみた夫の家事参加の頻度を示している。「食事の用意」「洗濯」「風呂のそうじ」のいずれについても、夫自身から見ても、妻から見ても、「ほとんど行わない」という夫の割合が、過半数をはるかに上回っている。とくに「洗濯」に関しては、「ほとんど行わない」夫の割合が8割を超えている。この3つの家事のうち、夫の遂行頻度が比較的多いのは、「風呂のそうじ」である。「週に1回くらい」行なっている夫の割合は、男性の回答によると2割近く、「週に4～5回」ないし「ほぼ毎日」行なっている夫も1割近くいる。

第1回家庭動向調査（1993年実施；妻による回答）によると、「炊事（後片付けだけでも可）」や「洗濯（取り入れだけでも可）」を「やったことがない」夫の割合は、それぞれ48.8％と52.8％であり、「月1～2回程度する」夫の割合は、30.5％と30.6％であった。家庭動向調査と全国家族調査とでは、カテゴリーの設定の仕方が異なるので一概に比較できない。しかし、全国家族調査では、「週に1回」も行なっていないが、「月に1～2回はする」という夫は「ほとんど行なわない」のカテゴリーに吸収されているようである。

表1において気になるのは、男性による回答と女性による回答の違いである。女性による回答の方が、男性による回答よりも、夫の家事遂行の頻度が少ない。全国家族調査は夫婦の双方に尋ねるペアサンプルではないけれども、男性の方が自分の家事遂行を高めに回答する傾向は、

表1　夫の家事遂行頻度：サンプル全体　　（%）

家事遂行頻度		ほとんど行わない	週1回くらい	週2-3回	週4-5回	ほぼ毎日	総数	標準偏差	平均	(妻の家事遂行平均)
食事の用意	男性の回答	76.5	12.0	5.1	1.4	5.0	2574	1.67	.66	6.54
	女性の回答	81.2	11.2	3.6	.8	3.1	2653	1.35	.46	6.62
洗濯	男性の回答	84.8	7.1	3.5	1.1	3.5	2547	1.43	.45	5.95
	女性の回答	89.1	5.2	3.1	.8	1.8	2644	1.09	.29	6.02
風呂のそうじ	男性の回答	63.4	18.8	8.6	3.0	6.2	2599	1.86	.97	4.45
	女性の回答	71.8	13.6	7.9	2.9	3.7	2671	1.59	.73	4.65

このサンプルにも現れている。

表1には、各家事項目について「ほとんど行わない」場合を0点、「週に1回くらい」行う場合を1点、「1週間に2～3回」行う場合を2.5点、「1週間に4～5回」行う場合を4.5点、「ほぼ毎日」行う場合を7点として算出した平均と標準偏差を示している。また参考までに、これらの3つの家事についての妻の遂行頻度の平均を示した。いずれの家事についても夫の遂行平均は「週に1回」をかなり下回っているのに対して、妻の遂行平均は「食事の用意」も「洗濯」もほぼ毎日に近く、「風呂の掃除」も「週に4～5回」行なっている。

家事遂行の平均に関して、男性の回答と女性の回答の差の検定を行なったところ、夫の遂行については、男性の方が女性よりも有意に高く回答していた。一方、妻の遂行については、女性の方が男性よりも有意に高く回答していたが、その差は夫の遂行についてよりも小さく、洗濯に関しては有意差は認められなかった。

3つの家事項目のそれぞれについての夫の家事遂行値を主成分分析したところ、男性の回答においても女性の回答においても、ひとつの主成分だけが抽出された。そこで、3つの家事項目への夫の遂行値の総和を求めて、「夫の家事参加」の程度を表わす指標とした。指標のとりうる範囲は0から21である。3つの家事項目のうちひとつでも回答が欠けている場合には、「夫の家事参加」の指標は算出していない。この指標の信頼性係数（α）は、男性の回答では.706（2,520ケース)、女性の回答では .614（2,587ケース）である。

(3) 夫の年齢と夫の家事参加

本稿の冒頭で紹介したように、夫（男性）の家事時間や家事遂行頻度は若年層に比べて中年層で減少し、高齢層で上昇するというU字カーブを描くことが知られている。**表2**は、夫の年

表2　夫の年齢別夫の家事参加の平均と分散分析の結果

	夫の年齢	28-29歳	30代	40代	50代	60代	70-77歳	78歳以上	平均	F値
食事の用意	男性の回答	.69	.52	.49	.76	.74	.86	—	.66	3.47**
	女性の回答	.24	.44	.35	.45	.54	.69	.31	.46	2.81**
洗濯	男性の回答	.62	.35	.31	.52	.51	.64	—	.45	3.23**
	女性の回答	.29	.24	.19	.27	.35	.53	.31	.29	3.50**
風呂のそうじ	男性の回答	1.69	.74	.68	.88	1.23	1.49	—	.97	13.73***
	女性の回答	1.07	.63	.55	.64	.88	1.06	1.03	.73	5.68***
家事参加 (N)	男性の回答	3.00 (63)	1.57 (433)	1.41 (585)	2.07 (620)	2.23 (550)	2.66 (269)	—	1.95 (2520)	6.94***
	女性の回答	1.51 (45)	1.28 (394)	1.00 (645)	1.18 (663)	1.57 (508)	2.11 (264)	1.30 (68)	1.33 (2587)	5.73***

注：*** $p < .001$,　** $p < .01$

齢別に夫の家事参加の平均をみたものである。これを男性の回答（**図1**）と女性の回答（**図2**）に分けてプロットしてみると、いずれも40代を底としたゆるやかなU字カーブを描いている。ただし、28歳未満のデータは得られていないので、若年層における夫の家事参加の多さは十分にとらえられていない。

図1　夫の年齢別夫の家事参加（男性の回答）

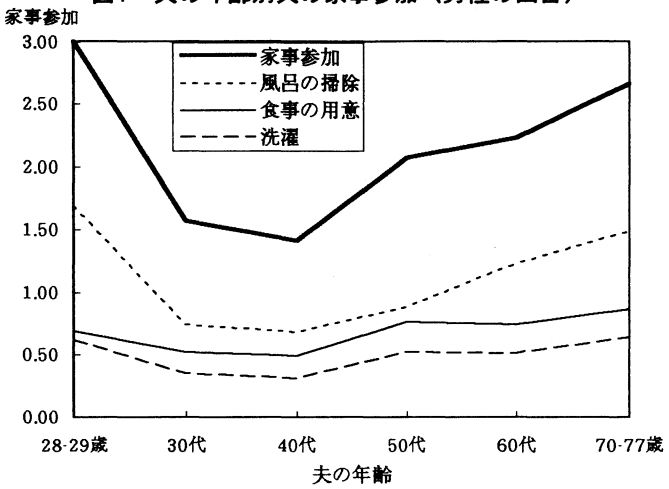
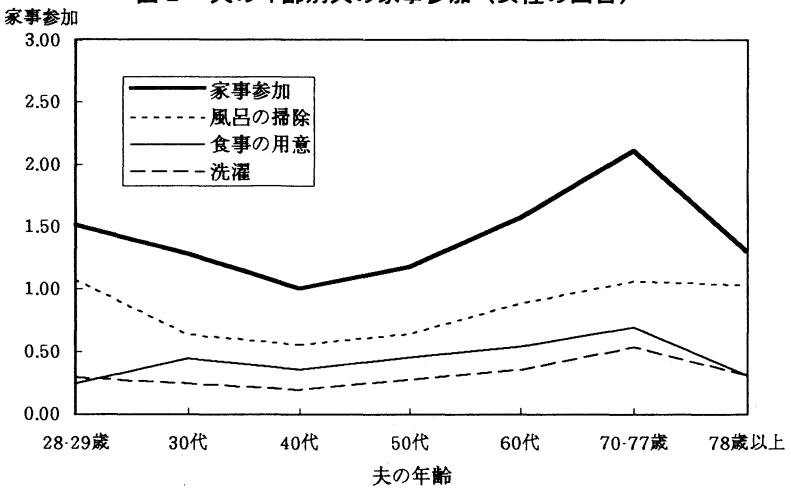


図2　夫の年齢別夫の家事参加（女性の回答）



夫の年齢階級を独立変数として分散分析を行なうと、男性の回答においても女性の回答においても、すべての家事項目に関して、年齢の効果は有意である。TukeyのＨＳＤ（Honestly Significant Difference）法による多重比較を行なったところ、「風呂のそうじ」に関しては、40代を中心とする中年層は若年層と比べても、高齢層と比べても、夫の家事参加が有意に少ない（若年層と中年層の差は男性の回答においてのみ有意)。一方、「食事の用意」と「洗濯」に関しては、中年層に比べて高齢層の夫は有意に多く参加しているが、若年層と中年層の間には差がない。夫の年齢が78歳以上になると（女性の回答のみ)、「食事の用意」や「洗濯」の遂行頻度が減少しているが、70-77歳に比べて有意な落ち込みではない。

図1と**図2**には、「夫の家事参加」指標の年齢別平均値もプロットしている。風呂のそうじの場合と同様に、40代の夫の参加が最も少ないU字カーブを描いている。40代に比べると50代の夫の参加は有意に多く、60代ではさらに増し、70-77歳の夫はさらにそれを上回る。

本稿では、このように中年層に比べて有意に多い高齢層の夫の家事参加を従属変数として、前節で取り上げた要因の主効果や交互効果を一般線形モデルを用いて検討する。従属変数の分析に移る前に、年齢にともなう夫婦の就業、健康状態、介護への従事、世帯構成、性別役割分業観の変化についてみておこう。

(4) 夫と妻の就業の変化

表3は、夫の就業と妻の就業との関係を夫の年齢別にみたものである。現在収入をともなう仕事に就いている場合を「就業」とし、休職中の場合も含んでいる。一方、過去に就いていたが今は就いていない場合と現在まで仕事に就いたことがない場合を「不就業」としている。

28～29歳では、夫のみが就業しているケースが、夫婦共働きのケースを上回っているが、40代、50代では、共働きが3分の2近くを占めている。60代では、共働きの割合は3割に減少するが、夫婦とも就業していないケースも3割を占めるようになる。後者の割合は、70～77歳の夫婦では3分の2近くになる。70-77歳では、共働きの割合は13.8%である。

共働き夫婦の割合は、一般に、妻の就業率と対応するが、高年齢夫婦の就業の特徴は、夫が不就業で、妻が就業しているケースが、他の年齢の夫婦に比べて多いことである。妻のみが就業している夫婦の割合は、30代や40代では1%以下であるが、夫が60代の夫婦では約1割、70-77歳の夫婦では約5%である。以上のように、夫が定年を迎える60歳を契機として、夫だけでなく妻の就業形態にも少なからぬ変化が生じ、夫と妻の就業形態の組合せも多様化する[2]。

表3　夫の就業・不就業と妻の就業・不就業のクロス集計　(%)

	夫の年齢	28-29歳	30代	40代	50代	60代	70-77歳	78歳以上
夫就業 妻就業	男性の回答	38.5	47.9	66.2	61.4	27.9	13.9	—
	女性の回答	45.1	52.4	70.6	66.7	31.5	13.8	9.5
夫就業 妻不就業	男性の回答	55.4	50.8	32.7	34.3	30.5	16.6	—
	女性の回答	51.0	46.4	28.2	27.5	25.6	15.5	11.9
夫不就業 妻就業	男性の回答	4.6	0.7	0.6	2.8	9.6	3.3	—
	女性の回答	2.0	1.0	0.9	3.6	11.8	5.9	3.6
夫不就業 妻不就業	男性の回答	1.5	0.7	0.5	1.5	31.9	66.3	—
	女性の回答	2.0	0.2	0.3	2.2	31.1	64.8	75.0
合計	男性/女性	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	男性の回答	65	455	621	676	623	332	—
	女性の回答	51	412	678	724	594	304	84

(5) 夫と妻の健康状態の変化

夫婦の健康状態は、年齢と比例して確実に衰える。**表4**は、夫の健康状態と妻の健康状態の関係を夫の年齢別にみたものである。回答者自身と配偶者の過去1年間の健康状態について、「たいへん良好」「まあ良好」「どちらともいえない」「やや悪い」「たいへん悪い」の5つの選択肢で尋ねている。本稿では、「たいへん良好」「まあ良好」「どちらともいえない」と回答した場合を「健康」、「やや悪い」「たいへん悪い」と回答した場合を「悪い」として分析を進める。夫婦ともに健康なカップルの割合は、40代以降徐々に減少し、どちらか一方、あるいは夫婦とも具合が「悪い」カップルの割合が増加する[3]（表4）。

表4　夫の健康状態と妻の健康状態のクロス集計　（%）

	夫の年齢	28-29歳	30代	40代	50代	60代	70-77歳	78歳以上
夫健康 妻健康	男性の回答	87.5	87.9	86.8	80.5	71.3	66.7	—
	女性の回答	88.2	85.3	83.1	77.1	73.1	62.6	58.7
夫健康 妻悪い	男性の回答	6.3	2.9	4.3	7.4	10.4	11.9	—
	女性の回答	9.8	9.0	9.7	12.4	13.2	13.6	12.0
夫悪い 妻健康	男性の回答	6.3	8.5	6.9	9.2	12.6	12.5	—
	女性の回答	2.0	4.9	5.2	6.4	10.5	15.4	16.0
夫悪い 妻悪い	男性の回答	0.0	0.7	2.0	2.9	5.8	9.0	—
	女性の回答	0.0	0.7	1.9	4.1	3.2	8.4	13.3
合計	男性/女性	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	男性の回答	64	445	608	660	589	312	—
	女性の回答	51	409	670	708	569	286	75

注）健康：「たいへん良好」＋「まあ良好」＋「どちらともいえない」
　　悪い：「たいへん悪い」＋「やや悪い」

(6) 夫と妻の介護への従事状況

前述したように、全国家族調査では、回答者自身ならびに配偶者が、「家族や親族の看病・介護」を現在どのくらいの頻度で行なっているかについて尋ねている。さらに、58歳以上の回答者に対しては、死別した親（回答者の両親と配偶者の両親）の介護や看病に回答者自身がどの程度関わったかについて、また、現在、介護や看病を必要としている配偶者に対して、回答者自身がどの程度の介護を行なっているかについて尋ねている。本稿では、これらの質問に対する回答分布やクロス表を検討したうえで、夫や妻が現在「家族や親族の看病・介護を行なっている頻度」の設問を取り上げて、夫の家事参加に与える影響について分析することにした[4]。

表5は、現在、夫と妻が家族や親族の看病・介護を行なっているかどうかを夫の年齢別にみ

表5　家族や親族の看病・介護への従事：夫と妻のクロス集計　(%)

	夫の年齢	28-29歳	30代	40代	50代	60代	70-77歳	78歳以上
夫：現在行なっている 妻：現在行なっている	男性の回答	0.0	2.4	4.5	5.2	3.8	0.9	—
	女性の回答	2.0	4.4	3.7	5.0	3.9	2.0	2.4
夫：現在行なっている 妻：行なっていない	男性の回答	0.0	0.2	0.3	1.5	2.1	2.7	—
	女性の回答	0.0	0.2	0.7	0.4	0.0	2.3	1.2
夫：行なっていない 妻：現在行なっている	男性の回答	1.5	9.7	10.0	11.7	8.0	6.3	—
	女性の回答	0.0	4.1	9.3	9.1	9.2	8.2	14.3
夫：行なっていない 妻：行なっていない	男性の回答	98.5	87.7	85.2	81.7	86.1	90.1	—
	女性の回答	98.0	91.3	86.3	85.5	86.9	87.6	82.1
合計	男性/女性	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
N	男性の回答	65	455	622	677	624	332	—
	女性の回答	51	412	678	724	595	306	84

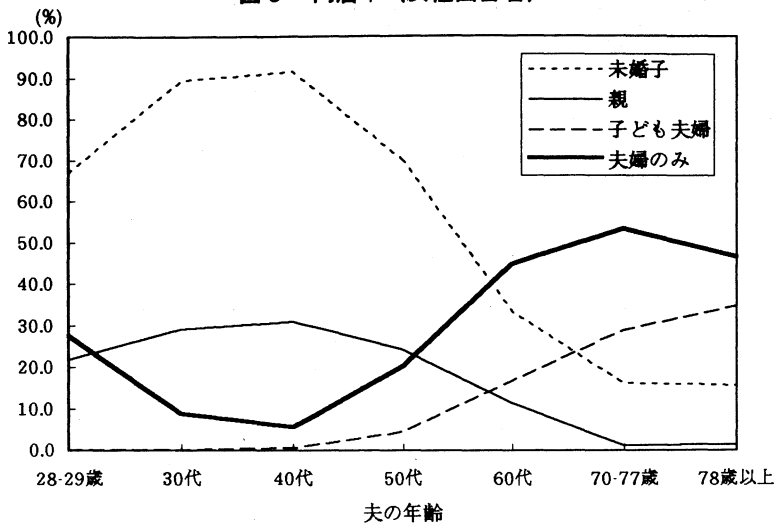
注）現在行なっている：「ほぼ毎日」＋「1週間に4～5回」＋「1週間に2～3回」＋「週に1回くらい」＋（この設問には「無回答」だが「配偶者の介護・看病」を「1ヶ月以上」行なっているケース）
行なっていない：「ほとんど行なわない」＋「該当者はいない」＋「無回答」

たものである。夫と妻の両方が看病・介護にあたっているケースは、夫の年齢が50代の夫婦で最も多い（男性の回答5.2%、女性の回答5.0%）。具体的に家族や親族の誰を看病・介護しているかについては尋ねていないが、50代では、親を看病・介護しているケースが多いのではないだろうか。妻のみが看病・介護にあたっているケースは、夫の年齢が50代のあたりで一度ピーク（男性の回答11.7%）を迎えた後、夫の年齢が78歳を超えたところで再び増加する（女性の回答14.3%）。この頃には、具合の悪い夫を妻が看病・介護しているケースが増えてくるのであろう。一方、夫のみが看病・介護にあたっているケースは、以上の2つの組合せに比べると少ないが、夫の年齢が70-77歳のところに小さな山がある（男性の回答2.7%、女性の回答2.3%）。具合の悪い妻を夫が看病・介護しているケースであろう。

(7) 同居率の変化

図3は、未婚子、親、子ども夫婦との同居率を女性回答者のデータに基づいてプロットしたものである。未婚子との同居率は、夫の年齢が30代、40代の時に最も高く9割前後である。50代以降減少し、60代では33.3%となり、70歳をこえると16%のところにとどまっている。親との同居率も30代、40代で高いが、3割前後である。60代になると11.3%に減少し、70歳以上では約1%になる。一方、子ども夫婦との同居率は、親との同居率と対照的に、50代の4.3%から60代で16.6%に増加し、70-77歳で3割弱、78歳以上で34.5%となる。**図3**には、回答者が配偶者のみと暮らしているケースの割合もプロットしている。夫婦のみの割合は、40代で

図3　同居率（女性回答者）



5.5%と最も低く、50代で2割、60代で45%と増え、70-77歳では過半数の53.3%である。78歳以上になるとやや減少する。男性回答者のデータもほぼ同様の分布を示している。

（8）夫と妻の性別役割分業観の変化

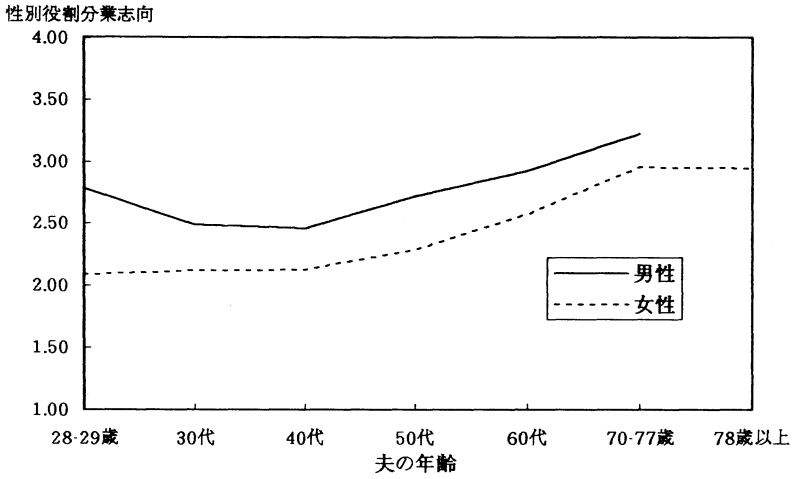
全国家族調査では、「家族規範に関する賛否」を6項目について、4点尺度で尋ねている（そう思う=1/どちらかといえばそう思う=2/どちらかといえばそう思わない=3/そう思わない=4)。これらの項目に対する回答（すべての年代）を主成分分析した結果、男性の回答においても、女性の回答においても、2つの主成分が抽出された。第1主成分への負荷が高い項目は、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「子どものためなら、親は自分のことを犠牲にすべきだ」「親の面倒をみるのは長男の義務である」「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」であり、伝統家族主義的成分といえる。もうひとつの主成分に負荷が高い項目は、「愛のない夫婦は離婚すべきだ」「未婚者でも、お互いに強い愛情があれば、性的な関係をもってもかまわない」であり、愛情優先主義の成分といえる。

このように全国家族調査の6項目の分析では、性別役割分業に関する成分を特定することができなかった。したがって本研究では、性別役割分業に直接触れている「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」の項目を取り上げて、性別役割分業観の指標とした。分析に際しては、高いスコアが性別役割分業志向の強さを示すように、カテゴリーの数値を逆転させた。

一般に、年齢が高いほど性別役割分業を肯定する傾向があり、まわりの事象を男性の役割と女性の役割へと分類する認知の枠組み（ジェンダー・スキーマ）を強くもっている。**図4**に示すように、全国家族調査においても、年齢が高いほど、性別役割分業を肯定する傾向が現れている。男性の回答では、30代と40代では性別役割分業を肯定も否定もしないところに平均値があるが、50代以降、性別役割分業を肯定する傾向が有意に強くなる。28-29歳と30代との間に

は差はない。女性においても、50代以降、性別役割分業を否定する傾向が弱くなり、60代では肯定の方に傾いており、その傾向は70-77歳ではさらに強い。一般に、女性は男性に比べて、性別役割分業観を否定する傾向が強い（肯定する傾向が弱い）ことが知られているが、全国家族調査においてもその傾向が現れている。

図４　夫の年齢別性別役割分業観



4.　結果

(1)　60代の夫の家事参加――元配置分散分析・相関―

表６は、60代の夫の家事参加に影響を与えていると思われる要因のそれぞれについて分散分析を行なった結果である（男性の回答)。妻が就業している場合には、不就業の場合に比べて、夫は食事の用意と洗濯を有意に多く行なっている。夫自身の就業に関しては、就業していない場合に、食事の用意と風呂のそうじを有意に多く行なっている。妻の健康状態も、夫の家事参加に強く関連しており、妻の具合が悪い場合には、食事の用意、洗濯、風呂のそうじのすべてについて、夫の実施頻度が有意に多い。一方、夫自身の健康状態はまったく影響していない。夫が現在、家族や親族を週に１回でも看病・介護している場合には、夫は、食事の用意、洗濯、風呂のそうじなどの家事も有意に多く行なっている。一方、妻が現在、家族や親族をどのくらいの頻度で看病・介護しているかは、夫の家事実施頻度と有意な相関を示さなかったで、分析から外した。

子ども夫婦と同居している場合には、同居していない場合に比べて、夫は食事の用意と風呂のそうじへの参加が有意に少ない。親との同別居は、40代以下の夫の家事参加には影響を与えているが（同居している方が、風呂のそうじの頻度が少ないなど)、60代の夫の家事参加には影響を与えていない。未婚子が家にいる方がいない場合と比べて、夫は食事の用意と洗濯を有意に多く行なっているが、既婚子との同居の要因をコントロールすると影響はなくなる。したがって、以下の分析では、子ども夫婦との同居の要因のみに注目する。

表6　60代の夫の家事参加：男性の回答（一元配置分散分析・相関分析）

	食事の用意		洗濯		風呂のそうじ		家事	
	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)
妻の就業		5.39*		5.89*		ns		ns
就業	.97	(215)	.71	(212)	1.06	(215)	2.44	(206)
不就業	.60	(353)	.39	(346)	1.33	(361)	2.11	(343)
夫の就業		4.91*		ns		22.71***		12.91***
就業	.60	(334)	.43	(329)	.88	(338)	1.70	(323)
不就業	.94	(235)	.62	(230)	1.72	(239)	2.97	(227)
妻の健康状態		14.80***		12.45***		9.67**		18.72***
健康	.60	(477)	.40	(467)	1.10	(482)	1.91	(462)
悪い	1.39	(90)	1.01	(90)	1.84	(93)	3.96	(87)
夫の健康状態		ns		ns		ns		ns
健康	.75	(446)	.46	(436)	1.24	(451)	2.21	(429)
悪い	.67	(99)	.70	(99)	1.10	(101)	2.16	(97)
夫の介護への従事		17.92***		16.30***		10.47***		27.49***
週に1回以上	1.96	(36)	1.51	(35)	2.34	(35)	5.74	(34)
なし	.66	(533)	.44	(524)	1.15	(542)	2.00	(516)
子夫婦との同居		6.32*		ns		9.62**		11.15***
同居	.27	(82)	.43	(82)	.57	(84)	.82	(80)
同居していない	.82	(487)	.52	(477)	1.34	(493)	2.47	(470)
妻の遂行頻度	*r*	-.31***	*r*	-.34***	*r*	-.47***	*r*	-.46***
性役割観	*r*	ns	*r*	ns	*r*	ns	*r*	ns

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表7　60代の夫の家事参加：女性の回答（一元配置分散分析・相関分析）

	食事の用意		洗濯		風呂のそうじ		家事	
	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)
妻の就業		7.96**		10.63***		3.16△		11.83***
就業	.76	(229)	.56	(229)	1.03	(229)	2.11	(218)
不就業	.37	(298)	.19	(294)	.76	(305)	1.16	(290)
夫の就業		ns		ns		5.55*		ns
就業	.53	(302)	.35	(303)	.73	(306)	1.44	(292)
不就業	.55	(226)	.35	(221)	1.08	(228)	1.73	(216)
妻の健康状態		ns		ns		ns		ns
健康	.52	(429)	.33	(425)	.84	(437)	1.51	(416)
悪い	.59	(83)	.41	(82)	1.10	(83)	1.75	(79)
夫の健康状態		ns		ns		ns		ns
健康	.55	(456)	.35	(455)	.88	(463)	1.59	(443)
悪い	.47	(71)	.35	(68)	.70	(68)	1.38	(64)
夫の介護への従事		ns		7.37**		ns		4.27*
週に1回以上	.97	(19)	1.10	(20)	1.26	(19)	3.06	(18)
なし	.52	(509)	.32	(504)	.86	(515)	1.51	(490)
子夫婦との同居		ns		ns		5.88*		7.96**
同居	.38	(87)	.24	(86)	.47	(87)	.69	(83)
同居していない	.57	(441)	.37	(438)	.96	(447)	1.74	(425)
妻の遂行頻度	*r*	ns	*r*	-.19***	*r*	-.41***	*r*	-.26***
性役割観	*r*	-.08△	*r*	ns	*r*	ns	*r*	ns

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

夫が家事を行なうことで、妻の家事量は減っているのであろうか？ **表6**には、夫の家事遂行頻度と妻の家事遂行頻度との相関を示している。食事の用意、洗濯、風呂のそうじのいずれについても、負の相関があり、とくに風呂のそうじに関しては、夫が行なえば、妻は行なわなくてよいという関係が明確に現れている。夫の性別役割分業観は、30代から50代の夫の家事参加には影響を与えているが（性別役割分業志向が強いほど、家事参加が少ない)、60代の夫の家事参加とは関連がない。

表7は、女性の回答について同様の分析を行なった結果である。男性の回答の場合と比べて、夫の家事参加に対して有意な効果を示している変数が少ない。その中で妻の就業は、明確な影響を示している。妻が就業している場合には、就業していない場合に比べて、夫は食事の用意、洗濯ならびに風呂のそうじをより頻繁に行なっている。一方、夫の就業は風呂のそうじに関してのみ有意であり、就業していない夫の方がより頻繁に行なっている。女性の回答では、夫の健康状態だけでなく、妻の健康状態も、夫の家事参加に影響していない。夫の看病・介護への従事と家事参加との関連は、洗濯に関してのみ有意であった。一方、子ども夫婦との同居は、風呂のそうじに関してのみ有意な効果を示していた。

女性の回答においても、夫の家事遂行頻度と妻の家事遂行頻度との間には、負の相関が認められるが、男性の回答の場合に比べて弱い。風呂のそうじにおいて相関が最も高いことは、男女の回答で共通している。食事の用意を夫がどのくらい行なうかは、妻の遂行頻度とは関連がないが、妻の性別役割分業観とは弱い関連が認められる。妻の性別役割分業志向が弱いほど、夫が食事の用意を行なう頻度が増す。

(2) 60代の夫の家事参加――一般線形モデル―

表8は、**表6**で検討した要因の効果を一般線形モデルを用いて分析した結果である（男性の回答)。妻の遂行頻度の要因は加えていない。それぞれの要因の効果は、他の変数の影響をコントロールしても、ほとんど変化がない。

表8　60代の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		17.79***	14.05***	ns	8.83**
夫の就業		7.64**	3.88*	17.73***	14.22***
妻の健康状態		15.31***	10.09**	8.25**	17.16***
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の介護への従事	*F*	16.51***	14.28***	6.44*	21.91***
子夫婦との同居		4.34*	ns	8.82**	9.17**
	F	9.18***	6.75***	7.48***	11.31***
	adjusted R^2	.083	.061	.066	.106
	N	542	532	549	524

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表9　60代の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		6.29*	11.06***	5.59*	13.82***
夫の就業		ns	ns	14.19***	7.40**
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の介護への従事	*F*	ns	2.82△	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	7.81**	7.13**
性役割観（共変量）		3.85*	—	—	—
	F	1.79△	2.47*	4.29*	4.35***
	adjusted R^2	.011	.017	.037	.039
	N	505	506	517	494

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表10　60代の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		12.36***	9.12**	ns	3.67△
夫の就業		7.76**	ns	4.14*	5.52**
妻の健康状態		8.10**	6.37*	ns	7.26**
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の介護への従事	*F*	5.00*	4.51*	4.64*	6.94**
子夫婦との同居		13.43***	ns	13.61***	19.84***
妻の遂行頻度（共変量）		38.00***	44.59***	130.29***	89.03***
	F	12.85***	12.04***	25.59***	23.15***
	adjusted R^2	.134	.129	.247	.234
	N	536	524	525	509

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表11　60代の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		4.92*	8.17**	3.19△	7.22**
夫の就業		ns	ns	5.27*	2.84△
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の介護への従事	*F*	ns	4.35*	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	14.52***	16.75***
妻の遂行頻度（共変量）		ns	21.60***	109.42***	44.36***
性役割観（共変量）		2.88△	—	—	—
	F	ns	5.08***	20.43***	9.92***
	adjusted R^2	.005	.054	.214	.115
	N	503	505	499	483

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表9は、女性の回答の結果である。ここでは、食事の用意についてのみ、妻の性別役割分業観を共変量としてモデルに加えている。男性の回答の場合と同様に、それぞれの要因の効果は、他の変数の影響をコントロールしても、あまり変わらない。**表6**と**表7**の比較で述べたように、男性の回答に比べて、女性の回答では、夫の家事頻度に有意な影響を与えている変数は少ない。

表10は、**表8**のモデルに妻の家事遂行頻度を共変量として加えた結果である。妻の遂行頻度は、食事の用意、洗濯、風呂のそうじのいずれについても強く影響しており、モデルの説明力（adjusted R^2）を大きく向上させている。とくに風呂のそうじについては、分散の25%がこのモデルによって説明されている。妻の遂行頻度を共変量としてコントロールすることにより、妻の就業、夫の就業、妻の健康状態、夫の介護への従事の影響は弱くなっている。これらの要因は、夫の遂行頻度に直接影響を与えているだけでなく、妻の遂行頻度への影響を介して、夫の遂行頻度に間接的に影響していると考えられる。一方、子ども夫婦との同居の影響は、妻の遂行頻度をコントロールすることにより、よりクリアになっている。

妻の遂行頻度は、女性の回答においても（**表11**）、風呂のそうじと洗濯に関して強い影響力を発揮している。食事の用意についてはまったく影響していない。男性の回答と同様に、妻の遂行頻度をコントロールすることにより、妻の就業と夫の就業の影響は弱くなり、子ども夫婦との同居の影響はよりクリアになっている。モデルの説明力は、風呂のそうじについてはadjusted R^2=.21であるが、洗濯と食事の用意については、男性の回答に比べてはるかに小さい。

(3) 60代の夫の家事参加――般線形モデル（交互効果を含む）―

以上のモデルにおいては、各要因の主効果のみに注目しているが、就業や健康状態ならびに子ども夫婦との同居の要因は、現実には互いに絡みあって、夫の家事参加に影響していると思われる。そこで、妻の家事遂行頻度を共変量としてコントロールしたうえで、夫と妻の就業、健康状態および子ども夫婦との同居の交互作用項を含むモデルを用いて分析を行なった。夫の介護への従事については、他の変数との交互作用は仮定していない。

表12は、男性の回答の結果である。主効果のみのモデルと比べて、妻の就業の主効果は弱まり、夫の就業と妻の健康状態の主効果は消えている。その代わりこれらの要因は、有意な交互作用を示している。妻の就業は、夫の就業や子夫婦との同居などと、夫の就業は、妻の就業や夫の健康などと、妻の健康状態は、夫の就業や子夫婦との同居などと有意な交互作用を示している。夫の健康状態は、主効果のみのモデルでは有意な効果を示さなかったが、このモデルでは、夫の就業や妻の健康と交互効果を示している。夫の介護への従事や子夫婦との同居ならびに妻の家事遂行頻度の影響については、主効果のみのモデルとほとんど変わらない。

交互作用を含むモデルによると、男性の回答からみた夫の家事参加の様子は次のようなものである。夫は、妻が就業している場合に、食事の用意や洗濯をより多く行なっている（食事の用意：週に1.15回＞不就業0.66回；洗濯：1.24回＞0.64回）が、その頻度は、夫自身が就業していない場合（食事の用意：1.45回；洗濯：1.35回）や子ども夫婦と同居していない場合（食

表12　60代の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル―交互効果を含む）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		2.69△	5.76*	ns	ns
夫の就業		ns	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の介護への従事		6.38*	5.81*	6.51*	9.20**
子夫婦との同居		19.43***	2.97△	14.95***	34.04***
妻の遂行頻度（共変量）	*F*	43.34***	41.13***	130.66***	92.56***
妻就業 x 夫就業		4.79*	2.69△	ns	4.68*
夫健康 x 夫就業		4.57*	6.27*	4.84*	6.04*
妻健康 x 夫就業		3.30△	ns	ns	5.66*
妻健康 x 夫健康		2.97△	ns	ns	ns
妻健康 x 妻就業		2.70△	ns	ns	ns
夫健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻就業		6.34*	ns	ns	4.86*
子夫婦との同居 x 妻健康		6.62**	ns	5.96*	14.11***
子夫婦との同居 x 夫就業		3.26△	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 夫健康		ns	ns	ns	ns
	F	7.28***	5.69***	11.68***	12.16***
	adjusted R^2	.166	.132	.257	.272
	N	536	524	525	509

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表13　60代の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル―交互効果を含む）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		10.11**	10.05**	ns	ns
夫の就業		4.76*	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態		4.21*	ns	ns	ns
夫の介護への従事		ns	4.66*	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	9.65**	14.24***
妻の遂行頻度（共変量）		—	20.84***	112.76***	46.81***
性役割観（共変量）	*F*	4.59*	—	—	—
妻就業 x 夫就業		ns	ns	3.30△	ns
夫健康 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
妻健康 x 夫就業		3.35△	ns	ns	ns
妻健康 x 夫健康		4.15*	ns	ns	ns
妻健康 x 妻就業		4.83*	ns	3.93*	ns
夫健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻就業		—	—	ns	3.10△
子夫婦との同居 x 妻健康		—	—	ns	ns
子夫婦との同居 x 夫就業		—	—	6.35*	3.30△
子夫婦との同居 x 夫健康		—	—	ns	ns
	F	1.78*	3.18***	9.92***	5.02***
	adjusted R^2	.020	.053	.233	.124
	N	505	505	499	483

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

事の用意：2.10回）にとくに多い（**図5・図6**）。夫が不就業で家にいても、夫自身の健康状態が悪いと夫の家事参加は少ない（食事の用意：0.71回＜夫不就業-夫健康1.35回；**図7**）。反対に、妻の具合が悪いと夫の家事参加は増す（食事の用意：1.29回＞夫不就業-妻健康0.78回；**図8**）。夫が不就業で家にいても子ども夫婦と同居していると、食事の用意もほとんどしない（0.16回＜夫不就業-同居していない1.91回）。子ども夫婦と同居していると、妻の具合が悪い場合にも、夫はほとんど家事をしない（食事の用意：0.07回；風呂のそうじ：0.08回；**図9**）。一方、子ども夫婦と同居していないと、具合の悪い妻を支えるように、夫は食事の用意や風呂のそうじを行なっている（2.02回；2.02回）。

子ども夫婦との同居の要因は夫の家事参加に強い影響力を持ち、上記のような交互効果に加えて、主効果も有意である。子ども夫婦と同居していると、夫の家事参加は抑えられている（食事の用意：0.23回＜同居していない1.59回；洗濯0.72回＜1.15回；風呂のそうじ0.54回＜1.74回）。夫が現在、家族や親族の看病・介護を行なっていると、家事への参加も多い（食事の用意：1.30回＞0.52回；洗濯1.25回＞0.62回；風呂のそうじ：1.56回＞0.72回）。

食事の用意についてはこの他に、妻の健康と夫の健康の交互作用（夫が健康で妻の具合が悪い場合に1.28回）および妻の就業と妻の健康の交互作用（妻が就業しているが具合が悪い場合に1.43回）が、認められた。

図5　夫と妻の就業別にみた60代の夫の家事参加食事の用意（男性の回答）

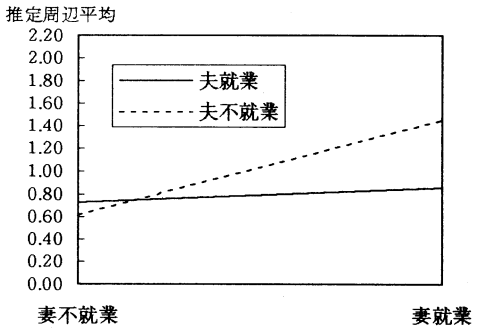


図6　妻の就業と子ども夫婦との同居別にみた60代の夫の家事参加一食事の用意（男性の回答）

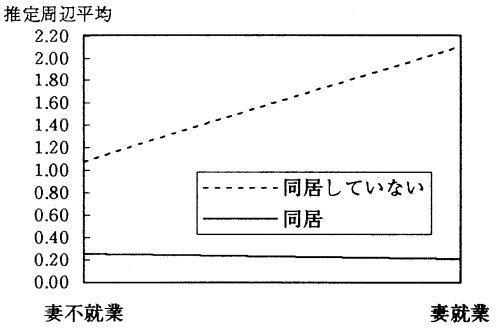


図7　夫の就業と健康状態の別にみた60代の夫の家事参加一食事の用意（男性の回答）

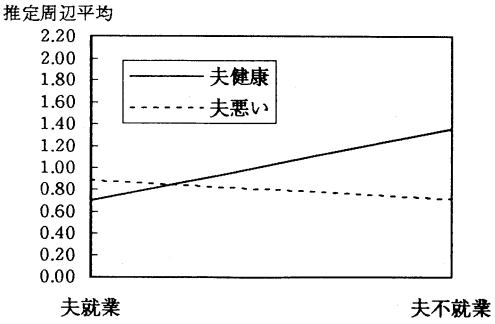
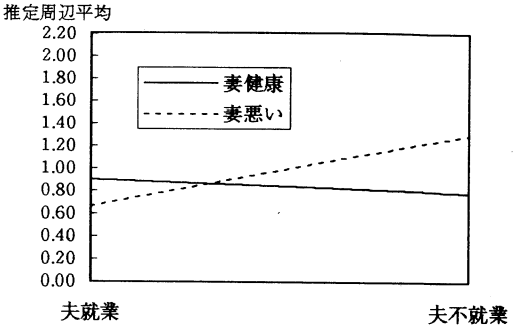


図8　夫の就業と妻の健康状態別にみた60代の夫の家事参加一食事の用意（男性の回答）



女性の回答（**表13**）においても、要因間の有意な交互作用が認められるが、男性の回答よりは数が少ない。女性の回答では、食事の用意と洗濯に関しては、子ども夫婦との同居の要因ならびにその交互効果は認められなかった。女性の回答からみた夫の家事参加の様子は次のようである。夫は、妻が就業している場合に、食事の用意や洗濯をより多く行なっている（食事の用意：週に0.98回＞不就業0.17回；洗濯：0.90回＞0.29回)。食事の用意については、夫の就業の有無も影響しており、就業していない場合の方が多く行なっている（0.85回＞0.30回)。食事の用意に関してはこのように加算効果であるが、風呂のそうじについては交互効果が認められる。すなわち、妻が就業していて夫が不就業のときに、夫の風呂そうじの頻度が増す（0.75回)。

妻の健康状態の主効果は認められないが、夫の健康、妻の就業ならびに夫の就業と交互作用を示している。妻の具合が悪ければ、健康な夫や就業していない夫は食事の用意への参加を増す（1.10回；1.00回；**図10**)。また、具合の悪い妻が就業している場合に、夫は食事の用意への参加を増す（1.19回；**図11**)。夫の健康状態は、食事の用意に関して主効果も示している（健康0.85回＞悪い0.29回)。食事の用意については、妻の性別役割分業観が有意な影響を与えており、妻の性別役割分業志向が弱いほど、夫の参加が多い。

洗濯については、妻の就業以外に夫が看病・介護を行なっているかどうかが影響している（介護している0.90回＞0.29回)。一方、風呂のそうじについては、子ども夫婦と同居しているがどうかが強い規定要因となっており、主効果以外に、夫の就業と交互作用を示している。夫

図9　子ども夫婦との同居と妻の健康状態別にみた60代の夫の家事参加―洗濯（男性の回答）

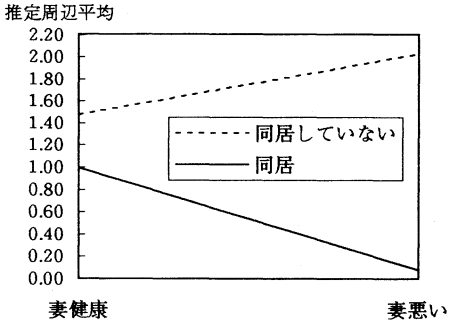


図10　夫と妻の健康状態の別にみた60代の夫の家事参加―食事の用意（女性の回答）

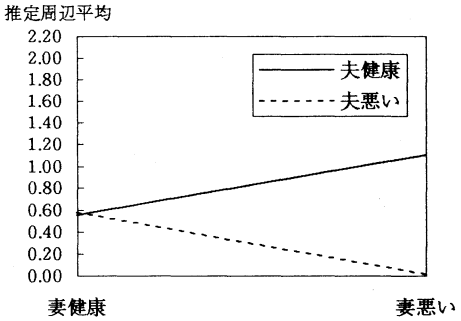


図11　妻の健康状態と就業別にみた60代の夫の家事参加―食事の用意（女性の回答）

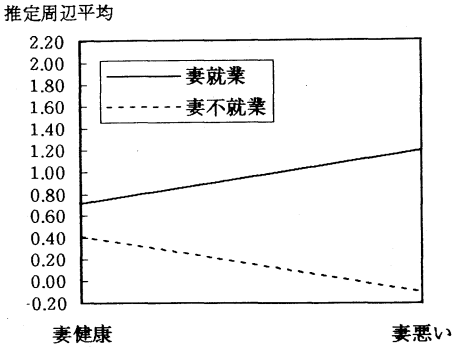
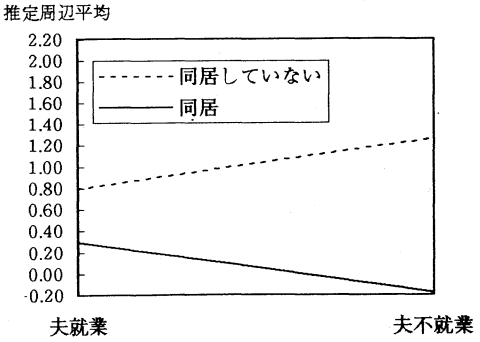


図12　夫の就業と子ども夫婦との同居別にみた60代の夫の家事参加―風呂のそうじ（女性の回答）



が不就業で家にいても子ども夫婦と同居していると風呂のそうじをまったく行なっていないが（推定平均値はマイナス)、同居していないと週に1.26回行なっている（**図12**)。

(4) 70-77歳の夫の家事参加――元配置分散分析・相関―

ここまでは、夫の年齢が60代の夫婦における夫の家事参加についてみてきた。本項では、夫と妻の就業率がさらに下がり、夫と妻の健康状態に不安が増し、子ども夫婦との同居率が高まる、夫の年齢が70-77歳の夫婦における夫の家事参加について検討する。

表14は、70-77歳の夫の家事参加に影響を与えていると思われる要因のそれぞれについて分散分析を行なった結果である（男性の回答)。どの家事項目についても、60代の夫婦に比べて、有意な効果を示している要因の数は少ない。妻の就業の要因は、風呂のそうじにのみ有意な関連を示しているが、その方向は60代の夫婦とは異なり、妻が就業していない場合の方が夫の参加は多い。一方、夫自身の就業も、風呂のそうじにのみ有意な関連を示しているが、その方向は60代の夫婦と同じく、夫が就業していない場合に夫の参加が多い。妻の健康状態は60代の夫婦と同じく、夫の家事参加に関連しており、妻の具合が悪い場合には、食事の用意、風呂のそうじについて、夫の実施頻度が有意に多い（洗濯は傾向差)。夫自身の健康状態は、60代の夫婦と同じくまったく影響していない。夫の介護への従事についても、60代の夫婦と同じく夫の家事参加を増やす方向に働いている。

子ども夫婦との同居の要因は、食事の用意についてのみ有意な関連を示しており、同居していない場合の方が夫の実施頻度が有意に多い。未婚子との同居の要因は有意ではない。70-77歳では、親と同居している夫婦は非常少ないので、親との同居の要因は除いている。

妻の家事遂行頻度は、60代の夫婦と同じく夫の家事遂行頻度と負の相関を示している。ここでも、風呂のそうじの相関が他に比べて強い。夫の性別役割分業観は、洗濯についてのみ弱い正の相関を示している。

表15は、女性の回答の結果である。60代の分析の場合と同様に、夫の家事参加に対して有意な効果を示している要因は、男性の回答よりも少ない。実際、有意な効果が認められるのは、風呂のそうじについてのみである。夫が風呂のそうじを行なう頻度は、妻が不就業の場合や夫が現在、看病・介護を行なっている場合に有意に多く、妻の遂行頻度とは負の相関がある。

(5) 70-77歳の夫の家事参加――般線形モデル―

表16は、一般線形モデルの結果である（男性の回答)。夫の介護への従事は、従事しているケースが12ケースと少なく、妻の健康状態の要因と重なるので、モデルから外している。ここでは妻の遂行頻度はコントロールしていない。食事の用意については、他の変数の影響をコントロールしても、有意な要因（妻の健康状態と子ども夫婦との同居）は変わらない。風呂のそうじについては、妻の就業と夫の就業の効果が消える。洗濯については、夫の性別役割分業観を共変量として加えたモデルも検討したが、有意な効果は認められなかった。**表17**は、女性の回答の結果であるが、有意な効果は認められない。

表14　70-77歳の夫の家事参加：男性の回答（一元配置分散分析）

	食事の用意		洗濯		風呂のそうじ		家事	
	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)
妻の就業		ns		ns		4.58*		3.21△
就業	.80	(48)	.46	(45)	.86	(52)	1.52	(45)
不就業	.87	(232)	.67	(230)	1.63	(241)	2.88	(224)
夫の就業		ns		ns		6.21*		ns
就業	.73	(82)	.57	(80)	.96	(86)	2.08	(80)
不就業	.91	(198)	.66	(195)	1.71	(207)	2.90	(189)
妻の健康状態		4.58*		3.64△		5.10*		8.46**
健康	.72	(218)	.54	(215)	1.31	(227)	2.21	(210)
悪い	1.36	(59)	1.01	(58)	2.06	(64)	4.22	(57)
夫の健康状態		ns		ns		ns		ns
健康	.85	(206)	.61	(203)	1.43	(217)	2.49	(197)
悪い	1.04	(62)	.83	(60)	1.63	(63)	3.43	(60)
夫の介護への従事		8.69**		8.20**		ns		6.90*
週に1回以上	2.54	(12)	1.96	(12)	1.58	(12)	6.08	(12)
なし	.78	(268)	.58	(263)	1.49	(281)	2.50	(257)
子夫婦との同居		6.15*		ns		ns		2.94△
同居	.37	(77)	.45	(76)	1.32	(81)	1.87	(75)
同居していない	1.04	(203)	.71	(199)	1.56	(212)	2.96	(194)
妻の遂行頻度	*r*	-.40***	*r*	-.31***	*r*	-.51***	*r*	-.46***
性役割観	*r*	ns	*r*	.11△	*r*	ns	*r*	ns

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表15　70-77歳の夫の家事参加：女性の回答（一元配置分散分析）

	食事の用意		洗濯		風呂のそうじ		家事	
	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)	平均	*F* (*N*)
妻の就業		ns		3.17△		4.27*		2.83△
就業	.57	(53)	.17	(54)	.52	(53)	1.15	(51)
不就業	.70	(219)	.59	(220)	1.16	(222)	2.26	(211)
夫の就業		ns		ns		ns		ns
就業	.70	(82)	.30	(82)	.85	(80)	1.87	(78)
不就業	.69	(192)	.62	(194)	1.14	(197)	2.21	(186)
妻の健康状態		ns		ns		2.89△		ns
健康	.68	(203)	.48	(203)	.93	(205)	1.98	(196)
悪い	.74	(57)	.70	(59)	1.45	(57)	2.49	(54)
夫の健康状態		ns		ns		ns		ns
健康	.68	(204)	.54	(205)	1.13	(208)	2.19	(197)
悪い	.67	(66)	.52	(67)	.84	(64)	1.86	(63)
夫の介護への従事		3.32△		ns		9.05**		6.34*
週に1回以上	1.63	(12)	.79	(12)	2.79	(12)	5.21	(12)
なし	.65	(262)	.51	(264)	.98	(265)	1.96	(252)
子夫婦との同居		ns		ns		ns		ns
同居	.60	(79)	.44	(80)	1.02	(81)	2.03	(76)
同居していない	.73	(195)	.56	(196)	1.07	(196)	2.14	(188)
妻の遂行頻度	*r*	ns	*r*	ns	*r*	-.41***	*r*	-.24***
性役割観	*r*	ns	*r*	ns	*r*	ns	*r*	ns

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表16　70-77歳の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	ns	ns
夫の就業		ns	ns	ns	ns
妻の健康状態		4.81*	2.94△	3.21△	6.63*
夫の健康状態	*F*	ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		5.73*	ns	ns	ns
	F	2.34*	ns	1.95△	2.76*
	adjusted R^2	.025	.002	.017	.033
	N	265	261	278	255

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表17　70-77歳の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	3.22△	ns
夫の就業		ns	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	3.83△	ns
夫の健康状態	*F*	ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	ns	ns
	F	ns	ns	2.11△	ns
	adjusted R^2	-.014	.003	.021	.000
	N	255	257	256	245

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表18　70-77歳の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	2.86△	3.27△
夫の就業		ns	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態	*F*	ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		28.89***	4.27*	ns	11.69***
妻の遂行頻度（共変量）		72.93***	26.23***	78.94***	68.42***
	F	14.73***	5.51***	15.37***	14.40***
	adjusted R^2	.241	.096	.257	.251
	N	261	256	250	241

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表19　70-77歳の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	4.14*	3.32△
夫の就業		ns	ns	5.27*	2.84△
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態	*F*	ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	ns	ns
妻の遂行頻度（共変量）		3.93*	ns	44.71***	12.03***
	F	ns	ns	9.19***	2.86*
	adjusted R^2	-.001	.006	.166	.045
	N	253	254	248	239

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表18は、**表16**に妻の家事遂行頻度を共変量として加えた結果である。妻の遂行頻度は、60代の夫婦と同様に、食事の用意、洗濯、風呂のそうじのいずれについても強く影響しており、モデルの説明力を大きく向上させている。とくに食事の用意と風呂のそうじについては、分散の25%前後がこのモデルによって説明されている。妻の遂行頻度をコントロールすることにより、妻の健康状態の効果は消える。妻の健康状態は、妻の遂行頻度への影響を介して、夫の遂行頻度に間接的に影響していると考えられる。一方、子ども夫婦との同居の影響は、60代の夫婦と同様に、妻の遂行頻度をコントロールすることにより、よりクリアになっている。

女性の回答においては（**表19**)、妻の遂行頻度をコントロールしても、食事の用意と洗濯については有意な効果はみられない。一方、風呂のそうじについては、モデルの説明力が大きく向上し（adjusted R^2=.02→.17)、妻の就業と夫の就業の効果が有意に転じている。夫が風呂のそうじを行なう頻度は、夫自身が就業していないときや妻が就業していないときに有意に多い。

(6) 70-77歳の夫の家事参加――般線形モデル（交互効果を含む）―

表20は、夫と妻の就業、健康状態、子ども夫婦との同居の交互作用項を含む一般線形モデルの結果である（男性の回答)。主効果のみのモデルと比べて、共変量である妻の遂行頻度と子夫婦との同居の影響はほとんど変わっていない。ただし、風呂のそうじについては、子夫婦との同居の影響が有意に転じている。交互作用については、60代の夫婦の場合に比べて、有意なものが少ない。

交互作用を含むモデルによると、男性の回答からみた70-77歳の夫の家事参加の様子は次のようなものである。60代の夫と同様に、70-77歳の夫の家事参加は、子ども夫婦と同居しているかどうかで大きく変わる。子ども夫婦と同居していると、夫の家事参加は抑えられる（食事の用意：推定値はマイナス＜同居していない1.73回；洗濯0.03回＜0.86回；風呂のそうじ0.21回＜1.45回)。

食事の用意については、子ども夫婦との同居の要因は主効果だけでなく、妻の健康状態や妻の就業と交互作用を示している。これらの点は60代の夫婦と共通している。夫は、子ども夫婦と同居していないと家事への参加が多いが、妻の身体の具合が悪い場合や妻が就業している場合はとくに、食事の用意への参加が増す（同居していない-妻悪い2.23回；同居していない-妻就業2.27回)。食事の用意については、夫の就業の効果も有意であり、就業していない夫は参加が多く（1.25回＞推定値はマイナス)、妻が就業している場合にはとくに多い（2.00回)。食事の用意に関しては、分散の28%がこれらの要因で説明される。

洗濯については、主効果のみのモデルと比べて、説明力はむしろ下がっている。風呂のそうじについては、妻と夫の健康状態が有意な交互作用を示しているが、夫と妻の具合がともに悪い時に夫の参加がとくに多い（1.59回）という結果であり、解釈が難しい。

表21は、女性の回答について交互作用項を含む一般線形モデルの分析を行なった結果である。統計的に有意な交互効果はひとつもなく、モデルの説明力も主効果のみのモデルよりも小さい。

表20　70-77歳の夫の家事参加：男性の回答（一般線形モデル―交互効果を含む）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	ns	ns
夫の就業		4.84*	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態	*F*	ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		30.21***	4.60*	8.61**	18.19***
妻の遂行頻度（共変量）		78.42***	26.72***	81.80***	71.34***
妻就業 x 夫就業		7.42**	ns	ns	ns
夫健康 x 夫就業	*F*	ns	2.74△	ns	ns
妻健康 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
妻健康 x 夫健康		ns	ns	4.50*	ns
妻健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
夫健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻就業		3.38△	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻健康		6.32*	ns	ns	2.88△
子夫婦との同居 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 夫健康		ns	3.31△	ns	ns
	F	7.22***	2.66***	6.70***	6.52***
	adjusted R^2	.277	.094	.268	.269
	N	261	256	250	241

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

表21　70-77歳の夫の家事参加：女性の回答（一般線形モデル―交互効果を含む）

		食事の用意	洗濯	風呂のそうじ	家事
妻の就業		ns	ns	5.24*	ns
夫の就業		ns	ns	ns	ns
妻の健康状態		ns	ns	ns	ns
夫の健康状態		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居		ns	ns	ns	ns
妻の遂行頻度（共変量）		3.75△	3.00△	40.04***	10.50***
妻就業 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
夫健康 x 夫就業	*F*	ns	2.85△	ns	ns
妻健康 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
妻健康 x 夫健康		ns	ns	ns	ns
妻健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
夫健康 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 妻健康		ns	ns	2.85△	ns
子夫婦との同居 x 夫就業		ns	ns	ns	ns
子夫婦との同居 x 夫健康		ns	ns	ns	ns
	F	ns	ns	3.93***	ns
	adjusted R^2	-.023	-.011	.159	.024
	N	253	254	248	239

注）△ .05<p<.10,　* p<.05,　** p<.01,　*** p<.001

5 おわりに

高齢者のいる世帯における家事については、これまで、子ども夫婦との同居との関連で論じられることが多かった。高齢者と同居していることが、子ども夫婦における妻の家事時間あるいは夫の家事参加にどのような影響を与えているかという視点を組み込んだ調査や研究は少なくなく（総務庁, 1978, 1983, 1988, 1993; 日本大学総合科学研究所, 1994; 人口問題研究所, 1995; 伊藤・天野・森・大竹, 1984; 林, 1989; 品田, 1996; Tsuya, 1996など)、親世代と子世代のあいだでの家事や育児に関する援助関係についての研究（三谷, 1993; 黒田, 1994; 井上, 1994など）も積極的に進められている。しかしながら、高齢夫婦における夫の家事参加に焦点をあてた研究は、ほとんど行なわれてこなかった。総務庁が5年ごとに実施している「高齢者の生活と意識」に関する国際比較調査においても、夫が家事をすることについての意識は尋ねているが、夫による家事の担当状況については分析が行われていない。高齢者のいる世帯、とくに高齢夫婦世帯の数および割合が、急速な伸びを示している現在、高齢夫婦における夫の家事参加についての調査研究の発展が望まれる。

岩井はこれまで、1993年の第1回家庭動向調査のデータならびに1995年のSSM調査のデータを用いて、高年齢層の夫婦における夫の家事参加について分析を行なってきた（岩井, 1998, 2001；岩井・稲葉, 2000)。本研究では、1999年の第1回全国家族調査のデータを用いて、これまで検討してきた要因に新たな要因を加えて、高齢夫婦における夫の家事参加への影響をみている。本稿で取り上げた要因は、夫と妻の就業、健康状態、介護への従事、性別役割分業観、親との同居、未婚子との同居、子ども夫婦との同居、妻の家事遂行頻度である。分析の対象としたのは、夫の年齢が60歳以上の夫婦であるが、データ全体を男性からえられた回答と女性からえられた回答に分け、さらに、夫が60代の夫婦と70-77歳の夫婦に分けて分析を行なった。

家庭動向調査とSSM調査と全国家族調査は、実施時期だけでなく、調査対象や設問文が異なるため、結果の比較には注意を要する。家庭動向調査は、女性を対象としており、2世代以上の夫婦が同居している場合は、若い世代の妻に尋ねている。したがって、夫の性別役割分業観や子ども夫婦との同居の影響をみることはできず、妻の家事遂行頻度についても尋ねられていない。しかし、夫と妻の健康状態と介護経験についての設問は、具体的で明確であり、夫の家事参加については、5項目（炊事、掃除、洗濯、ゴミ出し、買い物）を取り上げて、それぞれについて5つのカテゴリーで尋ねている。一方、SSM調査は、女性だけでなく男性にも尋ねているが、ケース数が少ない（夫の年齢が60代の男性票は241、女性票は251）ために世帯についての詳細な分析（夫婦世帯か否かのみ）は難しい。健康と介護についての設問はなく、妻の家事遂行についても尋ねられていない。また、夫の家事参加についても、2項目のみ（炊事、掃除・洗濯）を取り上げて3カテゴリーで尋ねているのでやや粗いスケールである。

全国家族調査では、夫の家事遂行頻度だけでなく、妻の家事遂行頻度についても、男性にも女性にも尋ねている。調査対象者の年齢の上限が77歳であるため、夫の年齢が70-77歳のケースについてもみることができる。夫と妻の就業、健康状態、介護への従事、性別役割分業観な

らびに家族構成についての詳細な情報もある。ただし、健康状態と介護に関する設問は、家庭動向調査に比べて、具体性を欠いており、矛盾を生じている。

本稿の分析で明らかになった結果の特徴は、以下のとおりである。1）夫の家事遂行頻度についての認知は、男性から見た場合と女性から見た場合で異なり、男性の方が全般的に高く認知している。2）夫の家事参加を規定する要因は、男性の回答と女性の回答で異なる。3）60代の夫婦と70-77歳の夫婦で異なる。4）子ども夫婦との同居の要因の影響が非常に強い。5）妻の家事遂行頻度の影響も非常に強く、この要因をコントロールすると、60代の夫婦では妻の就業、夫の就業、妻の健康状態の影響が低下する。6）夫の家事参加に影響を与える要因は、家事の項目によって異なる。7）妻の性別役割分業志向が強いほど、60代の夫が食事の用意を行なう頻度は抑制される。

夫の家事参加についての認知が、男性の回答と女性の回答で異なることは知られており、**2（6）**で触れたように夫婦の双方からデータを得た場合には、夫の方が自分の家事遂行を高めに回答する。夫と妻の回答の不一致について分析を進めたHuber & Spitze（1983）は、夫や妻の学歴が低いほど、また年齢が高いほど、不一致が多くなる、とくに40歳以上のカップルでは不一致が多いことを示している[5]。全国家族調査のデータは夫婦のペアサンプルではない。しかし、夫の家事参加についての男性と女性の回答のズレ（**表2**）は40代から有意に開き始め、50代、60代で有意である（70-77歳では風呂のそうじのみ）。

このように60代の夫婦では、夫の家事遂行の頻度について男女の回答に違いが生じているが、本稿の分析によると、夫の家事参加に影響を与える要因についても、男性の回答と女性の回答で異なる結果がえられた。**表12**（男性の回答）と**表13**（女性の回答）を比べてみると、夫の家事参加が妻の家事遂行頻度や妻の就業の影響を受けている点や、食事の用意への夫の参加が妻の健康状態そのものではなく、夫の健康や妻自身の就業との組合せによって影響を受けている点は共通している。しかし、介護への夫の従事や子夫婦との同居の影響が、女性の回答よりも男性の回答において強い点などは異なる。食事の用意に対する夫の就業の効果も、女性の回答では主効果であるが、男性の回答では妻の就業や夫自身の健康状態との交互効果となっている。モデルの説明力は、女性の回答よりも男性の回答の方が大きい。70-77歳の夫の家事参加についても、モデルの説明力は、女性の回答（**表21**）よりも男性の回答（**表20**）の方が大きい。実際、食事の用意と洗濯に関しては、女性の回答ではほとんど何も説明されていない。

男性の回答と女性の回答に違いがあり、夫の家事参加に影響を与える要因についても違いがあることは、SSM調査データの分析においても指摘された（稲葉1998；岩井1998)。しかし、違いの方向性については、SSM調査の結果と今回の結果は異なる。この点はさらに追及する必要がある。できれば夫と妻のペアのサンプルで検証することが望ましいが、少なくとも夫の家事参加について男女の回答が得られている調査（Japanese General Social Surveysなど）のデータでの検証が必要である。なお、Huber & Spitze（1983）は、夫による回答と妻による回答を個別に分析して比較を行ない、夫や妻の就業、収入、学歴などの影響に差はないが、夫の性別役

割分業観は夫の回答にのみ、妻の性別役割分業観は妻の回答にのみ影響を与える点が異なっていたと報告している。

夫の家事参加に影響を与える要因が男女の回答で一部異なることは受け入れたうえで、夫の年齢が60代の場合と、さらに高齢の70-77歳の場合とを比較してみよう。男性の回答によると、60代（**表12**）においても70-77歳（**表20**）においても、子ども夫婦との同居や妻の家事遂行頻度が、夫の家事参加に対して大きな影響力を持っていることは共通している。しかし、妻の就業の影響は60代の方が強い。夫の就業は60代でも70-77歳でも、夫の食事の用意に影響しているが、60代では妻の就業や夫の健康、妻の健康、子夫婦との同居などと交互作用を、70-77歳では妻の就業とのみ交互作用を示している。60代では、夫が現在、家族や親族の看病・介護に従事していることが、夫の家事参加に影響している。70-77歳のモデル（**表20**）にこの要因を加えてみても、有意な効果は示さなかった。

一方、女性の回答によると、前述したように、70-77歳（**表21**）では有意な要因はほとんどない。60代（**表13**）では、家事の項目によって、影響を与える要因がばらついている。食事の用意については、妻の就業の影響が強く、洗濯については、妻の遂行頻度と妻の就業、風呂のそうじについては、妻の遂行頻度と子ども夫婦との同居の影響が強い。

夫の年齢が60代の夫婦と70歳以上の夫婦とでは、夫の家事参加に影響を与える要因が異なるという結果は、家庭動向調査の結果と一致している（岩井, 2001)。家庭動向調査（女性の回答のみ）においても、夫の年齢が70歳をこえると、夫自身の就業ならびに妻の就業が夫の家事参加に与える影響は弱くなり、夫の就業と妻の就業の組合せによる交互作用も観察されなかった。ただし、家庭動向調査では、70歳以上の夫の家事参加においては、夫自身の健康状態と介護経験が抑制要因として効いていた。

全国家族調査の女性の回答では、なぜ、70歳以上の夫の健康状態や介護経験の影響をとらえることができなかったのであろうか。その理由は、家事項目が異なること（ゴミ出し、買い物がない）や年齢の上限を77歳としていることだけでないように思う。前述したように、全国家族調査における健康状態と介護に関する設問は、家庭動向調査に比べて、具体性を欠いており、回答の基準が回答者によってブレていたことも影響しているように思われる。

全国家族調査の分析では、子ども夫婦との同居ならびに妻の家事遂行頻度の影響を見ることが出来た。夫婦以外の世帯員の存在が夫の家事参加に影響を与えることは、ＳＳＭ調査の分析（岩井, 1998；岩井・稲葉, 2000）においても示唆されていた。全国家族調査のデータでは、他の世帯員が子ども夫婦である場合に、夫の家事参加が強く抑制されることが明らかになった。したがって、二世代の夫婦が同居している場合には、親夫婦においても、子夫婦においても、夫の家事参加は少ないことになる。子ども夫婦との同居の要因は、男性の回答においては、60代においても70-77歳においても、妻の就業や健康状態との交互作用を示している。

一方、妻の家事遂行頻度については、この要因をコントロールすると、60代の夫婦では妻の就業、夫の就業、妻の健康状態の影響が低下することが明らかになった。これらの要因は、夫

の家事遂行に対する直接の影響とは別に、妻の家事遂行に影響を与えることによって、夫の家事遂行に間接的な影響を及ぼしているのであろう。70-77歳の夫婦では、妻の家事遂行をコントロールすることにより、妻の健康状態の影響は有意でなくなった。子ども夫婦との同居の影響は逆に、60代においても70-77歳においても、妻の家事遂行頻度をコントロールすることでよりクリアになった。

夫の家事参加に対する夫婦の就業、健康状態、性別役割分業観、介護への従事、世帯構成、妻の家事遂行頻度の影響は、すでに見てきたように家事の項目によって異なる。風呂のそうじは、3つの家事の中でも男性の参加の多い家事項目であるが、子ども夫婦との同居と妻の家事遂行頻度の影響がとりわけ強い項目である。夫が風呂のそうじをする回数は、妻の回数と負の相関関係にあり、妻の回数が少ないと夫の回数は多い。おそらく実際にはこの関係性は逆で、夫のそうじの回数が少ないと妻の回数が多くなるのであろう。夫が風呂のそうじをする回数はまた、子ども夫婦と同居していると少なくなる。60代の男性の回答によると、子ども夫婦と同居していると妻の健康状態が悪くても、夫が風呂のそうじをすることはほとんどない（週に.08回)。子ども夫婦と同居していなければ、夫は健康状態のよくない妻を気づかって週に2.02回は風呂のそうじをしている。60代の夫をもつ女性の回答によれば、子ども夫婦と同居していると夫は不就業で家にいても、風呂のそうじをすることはほとんどない（推定平均はマイナス)。子ども夫婦と同居していなければ、不就業の夫は週に1.26回は風呂のそうじをしている。

食事の用意への夫の参加に関しては、夫と妻の就業および健康状態が、主効果や交互効果を示している。さらに60代の女性の回答では、家庭動向調査の60代の女性の回答と同じく、妻の性別役割分業観が有意な影響を示している。妻の性別役割分業志向が強いほど、夫の家事参加は少ない。家族全員が日々出入りする風呂と異なり、かつて「女の城」と呼ばれ「男子厨房に入らず」と言われた「台所」に夫が入り込むためには、妻の意識が壁になっているようである。食事の用意への夫の参加が増すためには、台所を開放する姿勢が、妻の側に必要である。

60代の女性の回答によると、食事の用意に対しては、妻の遂行頻度はまったく影響していない。風呂のそうじや洗濯に関しては、夫がやれば妻はやらない関係にある。しかし、食事の用意に関しては、少なくとも妻から見ると、夫が食事の用意をしてくれる分、妻は食事の用意をする回数を減らすというよりは、夫が食事の用意をしているときに妻はそばにいることが多いのではないだろうか。食事の用意は、夫と妻の共同行動の側面をもっているのであろう。

一方、洗濯への夫の参加は、60代では男性の回答でも女性の回答でも、妻の就業と介護への夫の従事ならびに妻の遂行頻度が影響している。家族の介護や看護を行なっている夫は、介護の一環として家事を行なっていることが少なくなく、別居している親族の看病や介護を通して、家事の必要性を認識し家事を行なっているではないだろうか。

性別役割分業観は、高齢の夫や妻ほど肯定する傾向が強い。にもかかわらず、高齢の夫婦では、食事の用意を除いて、夫の家事参加への影響が現れない。高齢の夫婦では、夫や妻の性別役割分業意識がどうであるかということよりも、夫婦のおかれている状況—妻が就業していて

家におらず時間の余裕もない、夫は退職して家にいて時間の余裕がある、妻の健康状態がよくない、夫は健康である、夫は家族や親族の介護や看護の経験があり家事の必要性を認識し介護を通した家事の経験があるなど―に対応することの方に、重きがおかれるようになるのであろうか。少なくとも、高齢の夫はそのように行動しているようである。

夫の家事参加に対する性別役割分業観の影響は、夫婦の年齢が上がるにつれて弱くなるという結果は、Szinovacz ら（1994）やKeith ら（1991, 1994）の分析結果と一致している。一方、Szinovacz ら（1994）の分析では、妻が就業している場合には、退職した夫ばかりでなく就業している夫もfemale tasksに同じくらい参加していたが、本稿では妻の就業に加えて夫の就業の効果が認められた。退職して始めて就業する妻の家事の一部を担おうとする日本の夫と、共働きの妻の家事は自らの就業に関わらず手伝うものだというアメリカの夫との違いであろうか。退職して始めて家事に目を向ける夫が日本において多いとしたら、夫の退職が家事参加に及ぼす影響は、アメリカ以上に大きいといえる。

高齢期を実り多いものとするために、資産管理や情報収集力だけでなく、家事能力の重要性がクローズアップされている。男性自身もこれを意識しており、各地の公民館や民間団体が主催する男性の料理教室は活況を呈している。料理研究家の小林カツ代は、1990年に高齢の男性たちから料理講習会の指導を依頼され、10年以上講習を続けている。小林は、著書『男の老い支度、めし支度』（2000）の中で、「料理力」について述べている。「老人力」という言葉が広く知られるようになっているが、「料理力」とは、料理することで、自らや家族の生活が栄養面や健康面で豊かになるだけでなく、家族や友人・知人とのコミュニケーションをはぐくむ力になるというのである。

本稿で見たように、高齢男性は、とくに職業生活から退いた男性は、自らの性別役割分業観はわきにおいて、妻の健康を気づかいながら家事に参加している。子ども夫婦と同居せず、自分たち夫婦の生活は自分たちでやるしかないという状況の場合にとくに顕著である。家事の中でも優先順位の高い「食事の用意」への夫の参加は、男性の回答でも、女性の回答でも、最もさまざまな要因の影響を受けている。食への関心、家族の健康やゆとりへの関心が、時間的にはきびしい中年期においても、家事の実践に結びつかないものであろうか。

［注］

1. データは日本家族社会学会全国家族調査委員会によって行なわれた全国家族調査データ（ＮＦＲ98）を許可を得て使用した。なお、同データの収集は平成10年度文部科学研究費補助金（課題番号10301010）による資金援助を受けた。
2. 夫の家事参加について、男性の回答と女性の回答に違いが見られたように、妻の就業についても男女の回答に差が生じている。夫の就業率については、男女の回答に差はない。妻の就業率は、女性の回答に比べて男性の回答で低い。夫婦ペアのサンプルではないので、この原因を知ることは難しいが、男性は妻の就業を正確に把握していない、あるいは妻が

就業していてもそれを就業の範疇に含めない男性たちがいるのであろうか。

3. 一般に、身体の衰えは、妻よりも年齢の高い夫に先に訪れるであろうから、妻は健康だが夫の具合が悪い夫婦の方が、夫が健康で妻の具合が悪い夫婦の割合よりも多いと予測される。現に、家庭動向調査（回答者は妻）では、妻は健康だが夫が手助けを必要としている夫婦の方が、夫が健康で妻が手助けを必要としている夫婦の割合よりも多かった（60代では6.2%＞2.2%、70歳以上では11.4%＞6.0%)。全国家族調査においても、男性の回答では、妻が健康で夫の具合が悪い夫婦の割合が、夫が健康で妻の具合が悪い夫婦の割合よりも多い。しかし、女性の回答によれば、20代から60代までは、夫が健康で妻の具合が悪い夫婦の割合が、妻が健康で夫の具合が悪い夫婦の割合よりも多い。「どちらともいえない」をはずして分析しても同様の傾向が得られた。男性の回答と女性の回答のこのようなズレは、回答者が配偶者の具合が悪いことに気がつかないためであるというよりは、質問の設定の仕方に問題があるように思われる。この質問を介護の必要性とクロスさせてみると、「配偶者が現在、介護や看病を必要としている」にもかかわらず、「配偶者は良好」と認知している回答者が男女とも少なくない（男性回答者では「必要としている」43ケース中12ケース；女性回答者では61ケース中８ケース)。どうやら、回答者によって配偶者の健康状態を判断する基準をどこに置くかが異なっているように思われる（介護が必要でも小康状態を保っているときには「良好」と答えるなど）。健康状態については、家庭動向調査のように具体的に尋ねる（「日常生活を一人でできますか」）方が、矛盾のない回答を得られるのであろう。

4. 看病・介護に関するこれらの設問に対する回答は、かなりの問題と矛盾を呈していた。まず、「家族や親族の看病・介護」を回答者自身と配偶者がどのくらいの頻度で行なっているかの設問については、「該当者はいない」という選択肢を設けているにもかかわらず、無回答が多かった。「無回答」の割合は、男性の回答では、夫自身については全体の6.2%（該当者の26.6%)、妻については5.5%（26.6%）であり、女性の回答でも、妻自身については全体の5.2%（23.1%)、夫については4.4%（23.1%）であった。また、「介護の必要性」に関する設問では、「配偶者が現在、介護や看病を必要としている」と回答しているにもかかわらず、「家族や親族の看病・介護」の設問では「（看病・介護の対象者となる）該当者はいない」と答えているケース（男性回答者では14ケース；女性回答者では17ケース）や、「健康状態」の設問で「良好」と答えているケースが男女とも少なくない（注３参照)。さらに、他の設問に対する回答との関係からみて、「配偶者の方は、現在、介護や看病が必要な状態にありますか」という設問を「配偶者の方は、現在、（どなたかの）介護や看病（をする）必要（のある）状態にありますか」と解釈したように判断されるケースが男性の回答に数ケースあった（介護や看病を必要としている妻が、ほぼ毎日、家族・親族を看病・介護しているなど)。

5. なお、Huber & Spitze（1983）によると、不一致の方向性は、人口学的属性や社会的属性の

ほとんどの変数と関連していなかったが、妻の就業上の地位とは関連していた。すなわち、妻が就業している場合には就業していない場合に比べて、夫も妻も自らの分担割合をより多く回答する傾向が見られた。

[参照文献]

Ballweg, John A. 1967. "Resolution of Conjugal Role Adjustment After Retirement," *Journal of Marriage and the Family*, 29: 277-281.

Coltrane, Scott. 1996. *Family Man: Fatherhood, Housework, and Gender Equity*. Oxford University Press.

Dorfman, Lorraine T. 1992. "Couples in Retirement: Division of Household Work," in M. Szinovacz, D. J. Ekerdt and B. H. Vinick (Eds.) *Families and Retirement*. Sage Publications. 159-173.

Dorfman, Lorraine T. and D. Alex Heckert. 1988. "Egalitarianism in Retired Rural Couples: Household Tasks, Decision Making, and Leisure Activities," *Family Relations*, 37: 73-78.

Harris, Phyllis Braudy and Joyce Bichler. 1997. *Men Giving Care: Reflections of Husbands and Sons*. New York: Garland Publishing, Inc.

Harris, Phyllis Braudy and Susan Orpett Long. 2000. "Recognizing the Need for Gender-responsive Family Caregiving Policy: Lessons from Male Caregivers," in S. O. Long (Ed.) *Caring for the Elderly in Japan and the U.S.: Practices and Policies*. New York: Routledge.

林廓子. 1989.「老人同居家族の家事と核家族の家事」. 直井道子 (編)『家事の社会学』. 第4章 (pp.113-136). サイエンス社.

Huber, Joan and Glenna Spitze. 1983. *Sex Stratification: Children, Housework, and Jobs*, Academic Press.

兵庫県家庭問題研究所. 1987. 『老人夫婦のライフスタイルに関する調査研究報告書』兵庫県・(財) 21世紀ひようご創造協会兵庫県家庭問題研究所.

稲葉昭英. 1998.「どんな男性が家事・育児をするのか？—社会階層と男性の家事・育児参加」. 文部省科学研究費 特別推進研究 (1)「現代日本の社会階層に関する全国調査研究」研究成果報告書.1995年ＳＳＭ調査シリーズ第15巻 渡辺秀樹・志田基与師 (編)『階層と結婚・家族』pp.1-42.

井上俊一. 1994.「変貌する結婚後の親子関係」.日本大学総合科学研究所 (編)『「現代家族に関する全国調査」報告書』pp.75-89.

伊藤セツ・天野寛子・森ます美・大竹美登利. 1984.『生活時間』光生館.

岩井紀子. 1997.「夫の家事分担に関する日米比較研究－NSFHと神戸調査」. 石原邦雄 (編)『公共利用ミクロデータの活用による家族構造の国際比較研究－米国ＮＳＦＨ調査データの利用を通して』平成8年度文部省科学研究費研究成果報告書. pp.29-44.

Iwai, Noriko. 1998. "The Division of Household Labor in Japan: Gender Inequality of Time Use and Factors Affecting the Division of Household Labor."『大阪商業大学論集』110: 107-134.

岩井紀子. 1998.「高年齢層の夫婦における夫の家事参加—夫婦の就業、世帯構成、性別役割分業観に関する分析」文部省科学研究費 特別推進研究 (1)「現代日本の社会階層に関する全国調査研究」研究成果報告書. 1995年ＳＳＭ調査シリーズ第15巻 渡辺秀樹・志田基与師 (編)『階層と結婚・家族』pp.43-69.

岩井紀子・稲葉昭英. 2000.「家事に参加する夫、しない夫」シリーズ『日本の階層システム：近代と変容』第4巻盛山和夫 (編)『ジェンダー・市場・家族』pp.191-212.

岩井紀子. 2001. 「高年齢層の夫婦における夫の家事参加—夫婦の就業、健康状態、介護経験、

性別役割分業観の影響—」平成８年度～１０年度文部省科学研究費（重点領域研究「ミクロ統計データ」公募研究班）「家族構造の国際比較のための基礎的研究－公共利用ミクロデータの作成と活用－」報告書. 石原邦雄（編）『公開個票データの活用による家族の国際比較の試み—「全国家庭動向調査」（日本）と「ＮＳＦＨ」（米国）—』pp.120-159.

Kamo,Yoshinori. 1997. "Discrepancy between Husband's and Wife's Response in Division of Household Labor," 石原邦雄 (編)『公共利用ミクロデータの活用による家族構造の国際比較研究－米国ＮＳＦＨ調査データの利用を通して』平成8年度文部省科学研究費研究成果報告書. pp.45-58.

Kaye, Lenard W. and Jeffrey S. Applegate. 1994. "Older Men and the Family Caregiving Orientation," in E. H. Thompson, Jr (Ed.) *Older Men's Lives*. Sage Publications. 218-236.

Keith, Pat M., Cynthia D. Dobson, WIllis J. Goudy and Edward A Powers. 1981. "Older Men: Occupation, Employment Status, Household Involvement, and Well-Being," *Journal of Family Issues*, 2(3):336-349.

Keith, Pat M. and Robert B. Schafer. 1991. *Relationships and Well-Being Over the Life Stages*. Praeger Publishers

Keith, Pat M. 1994. "A Typology of Orientations Toward Household and Marital Roles of Older Men and Women," in E. H. Thompson, Jr (Ed.) *Older Men's Lives*. Sage Publications. 141-158.

小林カツ代. 2000.『男の老い支度・めし支度—「料理力」ってなんだ？』海竜社.

国立社会保障・人口問題研究所編. 2000.『人口の動向：日本と世界—人口統計資料集—2000』厚生統計協会発行.

厚生省人口問題研究所. 1995.『1993（平成５）年　第１回全国家庭動向調査—現代の日本の家族に関する意識と実態—』.

黒田俊夫. 1994.「家族変動の牽引車・女性—伝統とリベラルの交錯する重層構造」. 日本大学総合科学研究所（編)『「現代家族関する全国調査」報告書』pp.23-56.

Lipman, Aaron. 1961. "Role Conceptions and Morale of Couples in Retirement," *Journal of Gerontology*, 16: 267-271.

三谷鉄夫. 1992.「現代日本の都市家族—世代間関係を中心として」. 日本大学総合科学研究所(編).『現代日本文化と家族』第８章(pp.173-184).

永井暁子, 1998,「家事遂行・分担の測定方法」第８回日本家族社会学会大会報告資料.

NHK放送文化研究所世論調査部 (編). 1996.『1995年国民生活時間調査報告書』.

日本大学総合科学研究所 (編). 1994.『「現代家族に関する全国調査」報告書—進行する静かな家族革命』.

西岡八郎. 1995.「夫の家事、育児に関する役割遂行の実態」(第３章)「夫の家事、育児遂行に対する妻の評定」『「1993(平成５)年　第１回全国家庭動向調査—現代の日本の家族に関する意識と実態—』厚生省人口問題研究所, pp.11-18; 19-25.

Nishioka, Hachiro. 1998. "Men's Domestic Role and the Gender System: Determinants of Husband's Household Labor in Japan," Journal of Population Problems, 54(3):56-71.

Shelton, Beth A. and Daphne John. 1996. "The Division of Household Labor." *Annual Review of Sociology*, 22:299-322.

品田知美. 1996.「既婚女性の家事時間配分とライフスタイル」『家族社会学研究』8: 163-173.

総務庁長官官房高齢者会対策室 (監修). 1997.『高齢者の生活と意識—第４回国際比較調査結果報告書』中央法規.

総務庁統計局. 1978.『昭和51年社会生活基本調査報告』.

総務庁統計局. 1983.『昭和56年社会生活基本調査報告』.

総務庁統計局. 1988.『昭和61年社会生活基本調査報告』.
総務庁統計局. 1993.『平成3年社会生活基本調査報告』.
South, Scott J. and Glenna Spitze. 1994. "Housework in Marital and Nonmarital Households," *American Sociological Review*, 59:327-347.
Spitze, G. and Ward, R. 1995. "Household Labor in Intergenerational Household," *Journal of Marriage and the Family*, 57: 355-361.
Szinovacz, Maximiliane, David J. Ekerdt, and Barbara H. Vinick. 1992. "Families and Retirement: Conceptual and Methodological Issues," in M. Szinovacz, D. J. Ekerdt and B. H. Vinick (Eds.) *Families and Retirement*. Newbury Park, CA: Sage. 1-19.
Szinovacz, Maximiliane and Paula Harpster. 1994. "Couple's Employment/Retirement Status and the Division of Household Tasks," *Journal of Gerontology: SOCIAL SCIENCES*, 49(3): S125-S136.
Tsuya, Noriko O. 1996. "Family Life and Employment in Japan, Korea, and the U.S.," *Proceedings of "Contemporary Family in Comparative Perspective."* Nihon University.
Vinick, Barbara H. and David J. Ekerdt. 1992. "Couples View Retirement Activities: Expectations Versus Experience," in M. Szinovacz, D. J. Ekerdt and B. H. Vinick (Eds.) *Families and Retirement*. Sage Publications. 129-144.

文部省科学研究費基盤研究（A）：10301010
家族生活についての全国調査（NFR98）報告書 No. 2-3

現代日本の夫婦関係

Marital Relations in Contemporary Japan

岩 井 紀 子 編

2001 年 6 月

日本家族社会学会
全国家族調査（NFR）研究会